

## 竹岡勝也の肖像（下）

山口，輝臣

九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門日本史学：准教授：日本近代史

<https://doi.org/10.15017/10316>

---

出版情報：史淵. 145, pp.31-88, 2008-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 竹岡勝也の肖像（下）

山 口 輝 臣

- 一 福岡・太宰府・札幌・仙台・東京 後半生
- 二 山寺 少年時代（以上、前々号）
- 三 山形 中学時代
- 四 仙台 高校時代（以上、前号）
- 五 東京 大学時代（本号）

【あらずじ】 草創期の本誌に十余編の論文を寄せた日本文化史家・竹岡勝也（一八九三〜一九五八）の評伝。（上）では、学者としての後半生を概観したのち、カトリックの濃厚な雰囲気の中での生誕から幼少期を描き、続く（中）では、山形中学校・第二高等学校時代の関心のありかを、読書体験と創作により叙述した。本号では東大入学から十年余り、歴史家としての修業時代を扱う。

## 五 東京 大学時代

大正四年（一九一五年）七月、第二高等学校を卒業した勝也は、東京帝国大学文科大学史学科へ入学、国史学を専攻する。昭和二年（一九二七年）に九州帝国大学助教として福岡へ赴任するまで、足掛け一三年に及ぶ東京生活のはじまりである。

この前後、入学に際しての競争試験は減多になく、勝也の進学先も志望通りのものであった。また東大の文科では、入学にあたって哲学・史学・文学の三学科のなかから所属を希望する学科を届け出て、二年次の開始までに専修を決め届けることとなっていた。ただし国史学をはじめとするいくつかの専修においては入学の時点で届け出ねばならなかった。<sup>(13)</sup>つまり勝也は、入学前までに国史学専攻を決断していたことになる。

法科でなく文科に進んだことは、中学・高校時代の彷徨からすると、ごく自然なことだろう。詩人にあこがれ、歌や小説を発表し、テニソン、バイロン、ゲーテにシラー、トルストイやドストエフスキーを耽読、漱石・鷗外から藤村・荷風・実篤と同時代の日本文学へも目を配り、オイケンやベルグソン、ニーチェの哲学書まで手にし、そしてなにより次郎兄を導きの師としていたのだから。高校でも法科から文科へと転じ、卒業した。<sup>(14)</sup>そして文科を有していた帝国大学はこの時期、東京帝大と京都帝大の二校のみであり、次郎兄（文科）・余四男兄（理科）と同じ東京帝大を選ぶのも至極当然のことだろう。ただ文科のなかで、哲学科でも文学科でもなく史学科、それも国史学専修を選んだことは、意外の感を与えるのではあるまいか。

なるほど、メレシコフスキーの『背教者ジウリアノ』における歴史家との邂逅、あるいはタゴールを介した東洋的なるものへの着眼など、勝也の軌跡のなかにも、歴史や日本への関心に繋がる要素がまったくなかったわけ

ではない。しかし勝也が読書によって積み上げてきた幅広い教養のなかで、和漢の古典の世界だけがすっぽり抜け落ちていたことを考えれば、国史学という選択が当然のものであったというのは難しい。この点は、同じ年に同じ大学の同じ専修へ入学した人物の閲読書と比べるとはつきりする。『源氏物語』、『太閤記』、『神皇正統記』、『太平記』、『保元物語』、『平治物語』……<sup>(10)</sup>。

しかも史学科は当時、文科大学のなかで圧倒的に不人気な学科だった。勝也が入学した次年度の史学科の新入生歓迎会ではこんな光景が見られた。

尋で田中、村川両教授前後に立たれ、近年頓に史学科志望者の減少せる時に当り、入学せられたる諸君は大に期する所ある篤志家ならざるべからずとて、吾等の責任の大を訓示せらる。<sup>(11)</sup>

この年の「篤志家」は一五名。その前年、すなわち勝也が入学した大正四年は一四名。なお、同じ大正四年、哲学科は三七名、文学科は五三名。当時の文科大学は三学科であり、入学者のうち史学科の学生が占める割合はようやく一割強<sup>(12)</sup>。もちろん史学科が国史・東洋史・西洋史の三専修であるのに対し、哲学科は九専修、文学科も七専修あるのだから、史学科生が少ないのは当然という見方もあるかもしれない。しかし講座数や教官数に三学科間で大きな差がない以上、やはり学科間の人気に顕著な差があったと考えるべきだろう。とにかくこの時期、史学科は、哲学と文学に圧され、ひどく志望者が少なかった。なお付け加えておけば、この傾向は戦前期はそのまま覆ることはない。多いときでも史学科の学生が全体の四分の一を超えることはなく、逆に一割を切ることもしばしばであった。

ただし常にそうだったわけではない。田中・村川両教授の訓示に、近年になつて減少したとあったように、史学科志望者が多かった時期もあった。文科大学卒業生の数が一〇名を超えた明治二六年（一八九三年）からしばらく、卒業生の半数近くが史学科という年が続く。ただしその勢いは早くも世紀が換わる頃には弱まり、ぼどな

くして史学科の学生数は哲学科・文学科より少ないという先述した傾向が定着する。<sup>(15)</sup>

史学科の不人気とその固定化の背景には、文科大学（大正八年より文学部）へ入学してくる学生と、史学科における学問との不適合があつた。すなわち大学生予備軍としての旧制高校生のあいだで、それこそ勝也らのように、読書によつて教養を積み、それによつて自らの人格の完成を指向するいわゆる教養派——その総帥として名指しされるのが次郎兄である——がひとつの勢力をなしてくると、文科大学／文学部は、そうした指向をもつた学生で占められていく。勝也より四歳下の三木清の言葉を借りると、教養という思想は、「政治といふものを軽蔑して文化を重んじる」ものであるとともに、科学や技術は文明に属し文化ではないとされ、また文化のなかでは「文学や哲学を特別に重んじていた」<sup>(16)</sup>。ひとたびこうした雰囲気<sup>(16)</sup>に馴れ親しんでしまうと、学生の選択肢は著しく狭まる。史学科は、政治史などの形で、文学部のなかでは天下国家への関心を比較的強く有していたこともあり、そうした潮流とのあいだに食い違いが生じていたのである。

もつとも、さらに付け加えると、勝也の在学時代には、そうした文科大学の雰囲気そのものが問われてもいた。同大教授の芳賀矢一が大正六年に発表した「法科万能主義を排す」<sup>(17)</sup>は、官庁のみならず企業にも蔓延する法学士優遇への批判を展開、これ以後、「法科万能主義」をめぐる論争が世上を賑わした。法科への優遇を批判する側は、技術者か文学士の処遇改善を求めることが多く、このうち後者を推す主張から派生する形で、文科大学の現状をめぐる論議が闘わされた。そこでは、文学士の就職が不振なこと、そしてその一因に、文科大学でなされている学問が実社会から乖離したものとなつている現状があることが、ほぼ共通の認識となつていた。これを「文科大  
学不振」と捉え問題視するメディアや文部官僚に対し、勝也と同年入学の渡辺吉次（哲学科）は、文科大学は「パ  
ンの踏み台」ではない、就職難などなら問題でないと弁じた。<sup>(18)</sup> いわば外から問題とされていることも、当事者  
にとつては問題とすらされていないなかつたわけであり、それだけ文科大学には、周囲とは性向の異なる人びと——も

ちろん勝也もそうした一人である——が集つていたということである。

いずれにしろ、勝也による史学科・国史学専修という選択は、いささか飛躍をともなつた風変わりな決断というべきものであつた。

\*

史学科国史学専修という決断については、断片的な史料からあれこれ推測するより、たとえ後年のものではあつても、本人に語つてもらふのがよいだろう。<sup>(四)</sup>

高校で文科に転じたときには哲学へ進む用意をした。仙台を引き上げ、夏休みは郷里の山寺で過ごし、九月に上京、東中野にあつた次郎兄の家へ厄介になる。「兄の家で眼に著くものは独乙語の本であつた。二階の兄の書齋は、ギツシリとこの独乙語の本に依つて充たされて居る。(中略)兄の本は、自分を幸福にすると共にまた圧倒して来たのである」。前号の終盤で引いた一節はこのときのことだつた。さらに引用を続ける。

自分はだんだん兄とは異なつた道を考へるやうになつて来た。日本の姿が大きく自分の心に映つて来たのはこの時の事であつた。自分は是まで日本に就てはあまり考へて見た事もなかつた。寧ろ學問に於ても、芸術に於ても、世界的なものを持たない貧弱な国として、はえない姿を心の一隅に映して居たに過ぎない。(中略)併し自分はその日本に就て、果して何を知つて居るのであらうか。思ひ浮かべようとしても何物も浮んで来ないではないか。西洋文化の光輝に光奪はれて、影のやうにくすんで見える灰色の世界ではあるが、自分の生活を完成させるためには、矢張りこの影の世界を照らして見る事は必要なのではないであらうか。自分の生涯をその仕事に捧げる気持ちには未だなれなかつたが、三年間の大学の仕事としては、誠に相応しいやうにも考へられて来た。そこへ兄の言葉からの暗示も加はつて、遂に大学に於ける自分の専攻は国史学といふところに落ち着いたのである。

西洋と日本という対立項を設定し、それを光と影へと見立て、影なる日本について無知である自分を発見する。自己の完成という生涯の目的に実現する一階段として、三年間の大学生活では影なる日本を知るのがよく、またその必要がある、そのために国史学専修を選ぶ——ここまで明快で、しかも世に流布する大正教養主義像と見事なまでに重なる説明を、大正四年秋の勝也がしていたかどうかは分からない。だが国史学という決断に飛躍があったこと、しかしその飛躍にもなにかの根拠があったことは確かであり、またそれが概ね右のようなものであったことも間違いないだろう。

勝也が知りたいと思つたのは日本であつた。その点では国史学専修に集つた学生の多くとそうかわりはない。しかしそこへと至る道筋はかなりかわつてゐる。カトリックのなかに生まれ、次郎兄に導かれて西洋文化のなかに彷徨い、人並み以上に強く「ギリシアおよびキリスト教の文化に哺育されて来た」（和辻哲郎）人物が、その果てに、自らの知における空白地帯として見出した日本。日本は探求すべき対象としてはじめから自明なものだったのでなはない。自己の完成という人生最大の目的との関係において、はじめて必要とされ、発見される。ただしそれによつて光の探求が止むわけではない。だがいまはとりあえず日本を知ることには力を傾ける——そうした態度である。

こうした心積もりの特徴は、同級生の平泉澄を見るとさらに明確になるだろう。勝也が第二高等学校の『尚志会雑誌』に文章を載せていた同じ頃、平泉も金沢の第四高等学校の『北辰会雑誌』にいくつか文章を発表している。しかしその内容はまったく異なる<sup>⑧</sup>。勝也が「赤い影」といった小説などであつたのに対し、平泉のそれは、「賢聖院史話」、「伝灯寺」、「温泉寺明覚」、「曾我兄弟の末葉」という題名からも分かるように、史実の考証を主題としたものを中心であつた。「賢聖院史話」は出生地である平泉寺に関するもの、「伝灯寺」、「温泉寺明覚」はともに加賀の史蹟を扱い、「曾我兄弟の末葉」は平泉寺の文書を用いた研究である。出生地への関心から、その関心を

満たしてくれる史料の探求へと赴いていったことが容易に見て取れよう。この先が国史学専攻となっても驚く者は誰一人ない——そうした軌跡である。遠く西洋を見つめるなか、ようやく、しかしやや唐突に日本を見出し、国史学専攻を決めた勝也とは、ほとんど正反對の道行きと言つてもよい。

ただしこのように書くと、二人の相違点はかりが強調されてしまうかもしれない。ところが平泉も、考証物を書き出す以前には、同じ『北辰会雑誌』に、「呪」や「故郷の友に」といった勝也ばりの文章を掲載している。このことはどう理解できるか？

ひとつには、これらの文章を、阿部次郎流の教養主義ないし人格主義の影響下のものと見なし、歴史考証によって平泉がそこから脱けだそうとしていったとする理解の仕方があり得よう。平泉のみに即するなら、十分に成り立つだろう。そしてまた勝也についても、ある程度まで有効である。教養主義なり人格主義なりを超えようとする試みとは、勝也においては兄からの自立にほかなるまい。本人自身が前引の箇所で「自分はだんだん兄とは異なつた道を考へるやうになつて来た」としていたことを思い出せば、勝也のなかに平泉と同様の物語を読み込むことも不可能ではない。

しかし勝也自身の言葉に依拠するなら、「兄の言葉からの暗示も加はつて」という部分を無視してしまつては、公正さを欠く。兄の言葉がいかなるものだったかの記述はない。しかしそれはなんらかの形で国史学専攻を促すようなものであつたはずである。すると、こう考えることもできるのではあるまいか。教養主義なり人格主義なりの代表者のごとく見られる導師であつた兄・阿部次郎のなかに、カントやゲーテへの回路だけでなく、国史学へと至るような面もあつたのだ、と。

勝也本人の説明が、自己の完成という頗る人格主義的な観点から行われていたことを思うと、こちらもさして無理な理解でもあるまい。いうなれば、兄である次郎から圧倒的な影響を受け続けた弟・勝也が国史学へとすす

むことを、兄からの自立としてのみ理解するのではなく、兄を介して学び、そして兄弟で共有されていった自己の完成という観念のなかに、日本を知るといふ契機がもたら含まれていたとするのである。そもそも大正教養主義ないし人格主義のなかに、日本というものを歴史的に語ろうとする欲望が埋め込まれていた、としてもよい。和辻哲郎が阿部次郎を助産者に、日本文化史という「新しい歴史学」の領野を切り開いていき、勝也がそれに影響を受けていくことなどを考えても、なかなか興味深い理解であると思える。しかし勝也に実作がひとつもないこの時点でかれこれ言うのは、さすがにまだ早過ぎよう。

\*

とにかく勝也は東大にて国史学の勉強をはじめた。かれが入学した大正四年から三年間は国史学の教員に変更はない。よって授業科目とともに表を掲げ、あわせて最小限度の説明をしておく。

教授は三上参次・萩野由之・田中義成の三名。

大正6年度
江戸時代史（享保中興より）
本邦教育史及演習
国史概説（国初より鎌倉末まで）
国史概説（建武中興より明治中興まで）
国史演習（禁秘抄 律）
平安時代史（大同弘仁以後）
吉野朝時代史
室町時代史
国史演習（禁秘抄 律）
古文書学 様式論
鎌倉時代史
国史に於ける政教関係（鎌倉時代）

主任教授の三上参次（一八六五～一九三九）は文科大学和文学科卒。明治三年より文科大学教授。勝也も受講したであろう江戸時代史の講義は、没後に『江戸時代史』二冊（富山房、一九四三～四年）として公刊されている。

萩野由之（一八六〇～一九二四）は文科大学古典講習科を卒業。東京高等師範学校教授を兼ね、国史学第三講座を担任。この講座は前田侯爵家からの寄付に基づいて明治四四年に設けられ、「殊に国史の特長を講授」するものとなっていた。有賀長雄が講師として「皇室帝室制度講義」の題目で担当してきたが、大正四年の新年度を

【表 勝也在学期の国史学関係科目】

	大正4年度	大正5年度
三上参次	江戸時代史(幕初より元禄時代まで) 本邦教育史及演習	江戸時代史 本邦教育史及演習
萩野由之	上古史 日本書紀講読 史籍解題及講読	国史 自大化至平安初期 令義解演習 皇室中心の本邦制度史
田中義成	桃山時代史 安土時代史統講	吉野朝時代史 桃山時代史
黒板勝美	国史概説 古文書学 上代史講義	国史概説 古文書学 鎌倉時代史
辻善之助	国史に於ける政教関係(自源平時代至鎌倉時代)	国史に於ける政教関係(鎌倉時代)

『史学雑誌』『歴史地理』より作成。

前に有賀が辞職、萩野が第二講座から移って担当になった。<sup>(19)</sup> なお九州大学所蔵の萩野文庫はかれの旧蔵書である。

田中義成(一八六〇～一九一九)は修史館の繕写生を振り出しに、曲折を経て、明治三八年に史料編纂官兼教授へ昇任。かれの講義も没後に門下生の手によって『南北朝時代史』(明治書院、一九三二年)以下として刊行されている。

助教教授は黒板勝美と辻善之助。黒板勝美(一八七四～一九四六)は明治二九年国史の卒業。古文書学と『国史大系』で有名。辻善之助(一八七七～一九五五)は三二年同じく国史卒。大正二年度より日本仏教史を講じはじめていた。勝也との関連はのちに卒業論文を検討する際に少し触れる。

これら国史学五教員の開講科目の内、概説をひとつと、それ以外の科目を八つとることになっていた。勝也の受講が確認できるものに、辻「国史に於ける政教関係」、黒板「鎌倉時代史」、萩野「平安時代史」がある。<sup>(20)</sup>

もちろん国史学の授業だけでは卒業できない。史学概論と東洋史学・西洋史学・地理学の概説それぞれ一科目が必修、東洋史学と西洋史学から一科目ずつと、そのほかに選択科目を五つとり、さらに語学(勝也は独語。一年次担当が大津康、二年次は青木昌吉)を二

学年継続し、最後に卒業論文を提出して口述試験に通ると文学士となる仕組みであった。<sup>(15)</sup> 史学概論・西洋史概説・地理学概説の三科目は三年間担当者が変わらず、順に坪井九馬三・村井堅固と箕作元八・山崎直方。東洋史概説は白鳥庫吉と市村瓚次郎が交互で担当したが、勝也は白鳥の講義に出たようである。<sup>(16)</sup>

このように必修ないしそれに近い科目については、勝也の受講科目をある程度まで確定することができる。だがそれ以外となると、推定する材料が揃わない。そこでひとつだけ、授業科目を見渡したところ、日本仏教関係の授業が目についたことを記しておこう。印度哲学の前田慧雲が関連する科目を毎年開講していたほか、例えば大正四年なら、このほかに村上專精の「日本仏教史（徳川時代）」と姉崎正治「日蓮上人の研究」などがある。辻善之助の講義もあわせて考えると、勝也が卒業論文で僧兵をとりあげたことに、これらがまったく無関係であると言いつけるのは難しいのではあるまいか。

\*

大正四年入学の史学科学生は一四名。国史学の六名は一年次から専修が決まっていた。

高井俊吉 藤田良策 藤本了泰 阿部勝也 平泉澄 杉溪由言

既に登場した平泉澄のほか、高井俊吉・藤本了泰の三名が金沢の四高出身者。残る藤田良策は一高の医科から、勝也は二高、杉溪由言は公家華族で学習院から。「何分わづか数名の一組であるから、すぐに親しくなつて、講義を聴くのも、遊ぶのも、大抵肩を並べ、手を携へてゐた」<sup>(16)</sup>。もつとも高井は在学中に亡くなり、杉溪は一年遅れて卒業したため、三年間で卒業したのは藤田・藤本・勝也・平泉の四名。このとき、前年入学の上野菊爾も一緒になつた。

勝也の学年では四高卒業生たちが中心になつたようだ。もちろん学年の半数を占めた影響もあつたらう。だがかれらにはそれ相応の素地もあつた。史学科の学生は大部分が入学とともに史学会へ入会したが、高井俊吉はす

でにそれ以前から会員であつた。<sup>(17)</sup>これに對し平泉澄は史学会会員でこそなかつたものの、日本歴史地理学会には入つて『歴史地理』を講讀していた。<sup>(18)</sup>いわば大学入学以前から自らの志望が明確に決まつていて、そしてその通りの学科に進んだのであり、勝也とは出発点からして違つた。

なかでも平泉澄は目立つた存在であつた。新入生歓迎を兼ねて四年一月一日に行われた国史談話会では、三上・萩野・辻の三教官や宮地直一・藤井甚太郎ら卒業生などを前に、早くも「既往の蘊蓄の一端」を発表している。越前国における郡数増加の起源と、平泉寺の記録による天海の名の起源のふたつの論である。<sup>(19)</sup>生まれた土地への関心から関連する史料の読解へとすすんでいき、そのまま最高学府において国史学を専攻するに至るといふ、幸福な軌跡を歩んだ人物にしてはじめて可能となる早熟さの披瀝である。披露すべき蘊蓄などなかつたに違いない勝也には衝撃的だつたらう。もつとも勝也については、ほかの新入生と同じく、国史談話会に出席したかどうかからして、確認できない。

その後も平泉は、国史談話会はもちろん、学生としては例外的に読史会例会や史学会大会へも出席<sup>(20)</sup>、二年生になる五年の九月からは史学会の学生委員に就任する。<sup>(21)</sup>国史談話会の改革を企てたり、同年中には新著梗概を『史学雑誌』に載せたりと、<sup>(22)</sup>学会活動にも積極的であつた。この頃の史学会は東京帝大の史学科とほとんど一体のものであり、平泉の活動の背景には、同会の評議員や委員でもある史学科の教官たちから、平泉の学業が高く評価されていたことがあつた。現にかれは三年次に特待生となつてゐる。<sup>(23)</sup>

これに對し、『史学雑誌』誌上に勝也の名を見つけるのは難しい。参加者がすべて記された会合の記録に当たつても、かれの名は記されていない。平泉とは違い、学会活動などには消極的で、どちらかと言えば目立たない学生だつたようだ。そうした勝也ではあつたが、在学中に一度だけ——ついでに言つと、これが生涯でも唯一なのだが——かれの文章が『史学雑誌』に載つた。修学旅行の共同報告書である。<sup>(24)</sup>

黒板勝美の斡旋で十年振りに復活した国史学専修の修学旅行は、大正六年三月二日に東京駅を出発、笠置山から奈良に入り、吉野をめぐって京都へと向かい、最後は比叡山から石山に抜けて四月二日に現地解散<sup>(10)</sup>という、都合一二日に及ぶ旅程であった。かなりの強行軍で、建築・彫刻・絵画の見学や古文書の閲覧など、寺院の巡検が大部分を占めることになるが、南朝の遺跡にも少なからぬ時間を割いているあたりに、黒板の強い指導を感じ取ることができよう。結果的に勝也が卒業論文でとりあげることになる僧兵の舞台を数多く回っていることも興味深い。なお、和辻哲郎が古寺巡礼の旅に出かけたのは、黒板一行より二月ほどのちのことである。

平泉は、冬場に病気で転地療養をしたせい<sup>(10)</sup>か、この旅行には加わっていない。ただし旅行の報告書が載った同じ号には論文「座管見」を發表している。その二号前にも平泉の「頼朝と年号」が掲載されており、「座管見」はかれが『史学雑誌』に書いた二本目の作品ということになる<sup>(10)</sup>。これらが活字になっていった大正六年の秋から冬にかけて、勝也はようやくはじめての論文となる卒業論文の執筆に勤しんでいた。大学入学直前に闇としての日本を知ろうと思いついて国史に來た者と、入学のはるか以前から国史志望を決めていた者との差は、そう容易に埋まるものではなかった。

\*

学会への関与などに見られるように、大学時代の勝也には、どこか自信なげな印象が漂う。そのよって來たるものがひとつのはずなどない。ただ大学がおもしろくないと勝也自身が感じていたことは、なかでも相当に重要なものであつたろう。のちに自らこう述べている。大学に入って学びはじめた国史学と自分の読書とは、「あまりに遠く距たつて居たために、兎角学校の講義に出る事が悒鬱になり」、「大学生としての自分の生活は、決して幸福なものではなかつた」<sup>(10)</sup>。

勝也が見出した距離とは、言い換えれば、読書によつて培ってきた自らの指向と国史学でなされてきた学問と

の距離にほかならない。要するに大学の国史学にうまく馴染めず、高校時代が懐かしかったのだ。勝也があえて試みた跳躍は、かれにとつて決して楽しいものではなかった。「講義を聴いて見ても何うも自分が求めるものには触れて来なかった。あまり縁遠い学科に這入り込んで来た事に面喰い、すっかり怠けものになってしまった」<sup>10)</sup>。

そうした事態は、文科大学の専門性との直面によつてももたらされた。学術の蘊奥を攻究することを目的とする帝国大学（帝国大学令第一条）における国史学では、史料編纂事業と一体になる形で、史料の考証を中心とする緻密な議論が支配していた。そして学生に対しても、その世界に習熟し、その道の専門家となることを要求していた。オリジナルな史料という研究対象をいち早く見出し、それを基礎に据えることで専門領域を構築していった国史学は、もっぱら読書という行為のなかから何事かを汲み取ろうとし、大学における専攻もその延長上に考えていた勝也にとつて、あまりにも専門的になりすぎていた。その上、そんな勝也の傍らには、そうした国史学とのあいだに指向性の違いを感じることもなく、その専門性にもすぐさま寄り添えるような同期生たちがいた。しかも勝也の場合、だからといって、これまでの指向を棚上げして、国史学の世界に沈溺するということはあり得ない。国史学を専攻するという決断そのものが、自己の完成という人生最大の目的との関係ではじめて導き出されてきたものであり、それを離れて国史学もなにもなかった。つまり自らの指向を抜きにした国史学の勉強などあり得ない。これまでの指向を保ちつつ、国史学の専門性にも適応していくこと——勝也に可能な道はこれ以外にはなく、大学での苦悩はここにあった。

\*

大学での苦悩に処する術は大学からしか得られないわけではない。東京に出てきた勝也には、大学以外の世界も大きく広がっていた。その扉を開けてくれたのは、やはり次郎兄であった。

次郎は、明治四〇年に大学を卒業してからも、事典の項目執筆や慶應義塾大学の講師などを務めながら哲学の

勉強を続ける一方で、夏目漱石主宰の『東京朝日新聞』文芸欄を担当したり、『読売新聞』の客員になったりと、広く文壇で活動していた。大正三年四月に最初の単著となる『三太郎の日記』を東雲堂より刊行すると、四年に『三太郎の日記第貳』、五年に『倫理学の根本問題』、六年に『美学』を、いずれも一高での同級生・岩波茂雄が経営する岩波書店から出版、一躍注目を浴びる存在となる。ちょうど勝也の大学時代のことである。

『三太郎の日記』が熱烈に受け容れられたことについては数限りない証言があるし、勝也の反応は（上）の冒頭で触れた。また倫理学や美学の著書もこれまでにないものと好評だった。だが次郎の清新さは本の中身にどまるところではない。いわばそうした本を刊行することからして新しかった。というのは、この頃には哲学へも専門化の波は及んでおり、まずは個別の専門的な論文を執筆して『哲学雑誌』などに載せ、学界内での評価を得ることで、高校や大学などに職を得るとするのが普通になりつつあった。次郎とは荘内中学時代から旧知の仲であり、桑木嚴翼のあと東大哲学科の主任を務めながら、辞典の編纂や翻訳以外にほとんど著作を残さなかった伊藤吉之助<sup>(10)</sup>——この人物が、公職追放を解除された勝也の北海道大学招聘に関わったことは前々号で記しておいた——などは、その範型と言えるだろう。哲学者もひとつの職業になったという言い方も許されるかもしれない。そうしたものは異なる道を、次郎は歩もうとしていた。『哲学雑誌』に専門論文を発表するわけではないが、哲学をしないわけでもちろんない。哲学界の評価など気にかけず、ひとり必死に思索を深めていったのである。ただしこのように言うと、次郎がひたすら禁欲的で、超俗的・出世間的であったかのような印象を与えるかもしれない。あえてそうでなかったとは言わない。しかしそうした印象が、社会との接点の少なさを意味するとして、明らかに誤りである。次郎の思索は、その過程や背景、動機や揺らぎまでもが、かれ自身の文章によつて新聞や雑誌を通じて公開されていた。『三太郎の日記』はいわばその集積にほかならず、またそんな『三太郎の日記』の著者による作品ということが、哲学叢書という専門書のシリーズ——次郎が中心となって企画した——の

なかの『倫理学の根本問題』や『美学』へ、読者を誘うことになったことも確かであろう。いわば阿部次郎という人物は、この時期、学界ではなく、文壇を拠点に思索を展開していたと考えた方がよい。大学教師の職を去って新聞社へと入った漱石の門下——ただし漱石は大正五年一二月に逝去——で、文壇時評に類する文章をしばしば書く一方、学会誌へ論文を載せるわけでもない人物を、それ以外どう捉えられるというのか。

こうした位置に身をおいて思索に励んでいたのは、なにも阿部次郎一人ではなかった。かれの友人たち、すなわち安倍能成、小宮豊隆、そして和辻哲郎といった、漱石の薫陶に触れつつ、小説などよりは評論を主戦場としていた人びともそうだった。このような存在の広がりには、一方では、卒業しても容易にはアカデミック・ポストを得られないという世代的な要因に基づくものであるとともに、他方では、学界の現状は哲学本来の姿からは遠く、哲学はそれとは別の形でなされるべきであるとの確信と、さらには哲学にとどまらず文学や史学などへも関心を抱くことを当然とし、狭義の哲学のみ研究することをよしとしない信念とが、共有されていたことによるものでもあった。

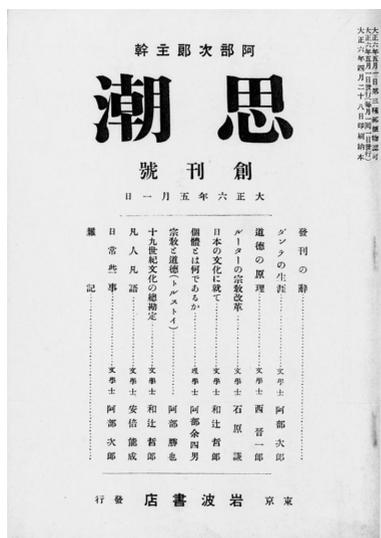
そうしたかれらに活動の場を提供したのがメディアであった。またかれらもその力を十分に自覚し、積極的な活用をはかっていった。次郎はこう述べている。

若し教壇で講義をすることが正しいならば、筆によつて主張し、解説し、理解を助け、興業を導き出す事業も亦正しい筈である。自分は雑誌記者となることを恥としない。<sup>(13)</sup>

教壇に文壇を対置させ、自らを雑誌記者になぞらえるこの挑戦的な言辞が掲げられたのは、次郎を主幹とする雑誌『思潮』の創刊号である。メディアの威力を重々承知していた次郎は、はやくから自前の雑誌を持つことを目標としていた。<sup>(14)</sup>これは大正六年五月に岩波書店より『思潮』を旗揚げすることで実現した。次郎とともに同人となったのは、安倍能成、小宮豊隆、石原謙、そして和辻哲郎。次郎とよく似た境遇にいたとともに、そうした

あり方に矜持を抱いていた人びとである。そのことは周囲にも認められていた。和辻哲郎を京都大学へ誘う手紙のなかで西田幾多郎はこう述べている。「民間に於て一旗あげる御考であつても一度はアカデミックな圈内に入つて」はどうか、と。<sup>(16)</sup>阿部や和辻らには、少なくともある時期まで、民間で「一旗あげる」との思い、別の言い方をすれば、文壇における活動だけでやっていこう、やっていけるのだという思いが強かつた。現に第一次大戦後しばらくすると、小説家たちには、副業することなく生活できるような市場が開かれていく。<sup>(17)</sup>

『三太郎の日記』や哲学叢書に引き続き、この『思潮』も清新な印象を与え、熱烈な支持者を獲得した。ただ錚々たる人物が名を連ねてはいたが、かれらは岩波茂雄を含めていずれも次郎の友人であり、編集その他は同人誌のような感覚でなされていた。<sup>(18)</sup>そのため在京の兄弟たち、すなわち余四男と勝也も、『思潮』に関わっていくことになる。



『思潮』創刊号。次郎のほか余四男と勝也、そして和辻哲郎の名が見える。

創刊号の表紙には重複を除くと七名の執筆者が並ぶ。そのうち三名は阿部姓。次郎・余四男、そして勝也。あたかも家族経営の雑誌のようですらある。次郎の「アンヘンガー」で固めたとの世評も、否定はし難いところがある。余四男は論文を出し、勝也はトルストイの宗教論を翻訳した。<sup>(19)</sup>二高時代の勝也がトルストイとドストエフスキーを導師としていたことは、前回記した。おそらくそうした関係もあつて、次郎はこの翻訳を勝也に頼んだものだろう。このとき勝也は大学二年生。国史学という専攻との繋がりは皆無に等しいものではあるが、勝也は平泉よりもはや

く、校友会レベルを超えた雑誌の表紙に名を刻んでいたことになる。たとえそれが兄の存在を介したメディアとの距離の近さによるもので、そして兄によって相当に手直しされているものであったとしても。<sup>(10)</sup>

結局のところ勝也には、『思潮』誌上にトルストイの翻訳以外のものを載せる機会は訪れなかった。かれが卒業論文に忙しくなっていた頃から雑誌の先行きは曇りはじめ、やがて廃刊になったことによる。<sup>(11)</sup> しかしここで勝也は翻訳料などより断然大きなものを得た。和辻哲郎との出会いである。

\*

この時期の和辻哲郎については、すでに書いたことがある。<sup>(12)</sup> しかしながら論旨の都合上、ここでも言及しないわけには行かない。増補しつつ再説することをお許し願いたい。

和辻哲郎の多彩な研究領域のひとつに日本文化に関する研究をあげることには異論はないだろう。もっとも有名なが大正八年刊行の『古寺巡礼』であり、翌年の『日本古代文化』や大正一五年の『日本精神史研究』などが続く。いずれも岩波書店より出たものである。ただし明治四五年に東京帝国大学の哲学科を出た和辻は、最初からこうした分野の文章を書いていたわけではない。はじめての著書は大正二年の『ニイチエ研究』<sup>(13)</sup>であり、二年後には『ゼエレン・キエルケゴオル』(ともに内田老鶴圃)を上梓している。

ニイチエやキルケゴールから古き日本へ。かつてこの現象は、日本回帰というあやふやな言葉で説明されていた。ところがかれが残したノートによって、すでに『ニイチエ研究』執筆当時から「日本歴史の文明史的意義」などへ思索を廻らせていたことが明らかとなり、もはやそうした言葉で理解することは難しくなった。<sup>(14)</sup>

『古寺巡礼』と『日本古代文化』とのあいだに、和辻はもう一冊『近代歴史学』という本を、これまた岩波書店から出している。もっとも同書は和辻の著したものではない。カール・ランプレヒトの“Moderne Geschichtswissenschaft”を訳したものである。

ランプレヒト（一八五六―一九一五）は文化史を唱え、世紀転換期のドイツの学界に一大論争を捲き起こした。ランケ流の政治史に対し、かれは文化史の優越性を熱烈に主張し続けた。政治史は事件史・人物史であつて物語に過ぎない、一回的な事件でなく繰り返し生起するもの、個人ではなく集団に着目して分析すべきであるとし、それを文化史と称した。さらに科学としての歴史学を標榜し、ヴント、のちにはリップスの心理学によつて歴史学の基礎付けを試みる一方、普遍的法則を追及して独自の発展段階論を構成した。<sup>(18)</sup> そのランプレヒトが米国に招かれて行つた講演の記録が『近代歴史学』である。いふなればランプレヒト文化史の入門にして精髓が同書であつた。

かれは大正期の日本でもよく知られた学者であつた。それが主として文化史という考え方への共感に基づくものであることは言うまでもない。ただそのみにとどまるものではなかつた。<sup>(19)</sup>

著作活動のみならず、研究所の組織化などにも長け、「学界の企業者」などとも呼ばれていたランプレヒトは、ドイツ・モデルの世界史を検証するにあつて東アジア、わけでも日本を重視、研究所にも多くの日本人研究者を招いた。石橋智信・新見吉治・三浦新七といった面々であり、その師匠筋にあたる姉崎正治や福田徳三とも交流があつた。その影響もあつて、「彼の論著に於てその史観を適用する毎に、言必ず日本の文化発展の事に及ぶ」といった風であり、<sup>(20)</sup> 大戦の勃発とそれから間もない死がなければ、来日を果たすはずであつた。

かれが日本に着目したのは、ドイツから抽出した普遍史の過程と同じものを、そこに見出せると考えたことによる。普遍史である以上、ドイツとは別の場所においても、同じ過程を辿っている必要がある。日本はそのことを証明する実例であると、かれは考えた。自らが唱える普遍史の正しさを日本に見出そうとするランプレヒトの企図は、結果として、日本を世界史の内部へ、しかもその世界の中軸をなすとされる西洋と同質のものとして包摂しようとする試みとなり、世界史のなかで日本にこれまでになく大きな位置づけを与える学説となつた。する

と当然のことながら、かれが日本へと注ぐまなざしは、これまでの西洋の学者のそれとは異なるものとなる。このことは、日本において、かれに対する親近感を生み、その人気を支えることとなった。一種のランプレヒト・ブームである。しかもかれのもとに馳せ参じた学者から分かるように、その裾野は狭い意味での歴史学を超えて広がっていた。

和辻がランプレヒトの翻訳を最初に公表したのは雑誌『思潮』の大正七年八月号であった。同じ号の巻頭論文も和辻の手になり、「昨夜出発前の僅かな時間に、Z君の所で、アジャクタ壁画の模写を見せてもらった」とはじまる。そう、のちに『古寺巡礼』へとまとまる連載の開始である。そもそも同誌の創刊号（六年五月）に「日本の文化に就て」を載せたのが、和辻が日本についての研究を公にした最初であった。そしてその冒頭こそ、本稿が導きの糸のひとつとしてきた次の一文であった。「我々は自ら気づかないでゐる、しかし我々は希臘及び基督教の文化に哺育されて来たのである」<sup>(18)</sup>。同じ号に勝也も参加していたことは記したばかりだ。ついでに言う、和辻が史学会の会員になったのも、ちょうどこの頃である。古寺巡礼の旅に出た頃でもある<sup>(19)</sup>。

つまり阿部次郎を主幹に、和辻も同人として参加した『思潮』こそ、日本文化史家としての和辻をはじめて世に送り出した媒体なのである。しかも次郎はその際に、単なる雑誌の主宰者というもの以上の役割を果たした。しばしば行き来を繰り返していた次郎と哲郎は、ときに「日本文化系統論」を闘わせるなどしており、和辻の言葉を借用すれば、次郎はその助産者だった<sup>(20)</sup>。

まさにその傍らに勝也はいた。生まれ出でんとする和辻の日本文化史を目の当たりにし、その助産者を兄に持ち、大学で国史学を専攻していた勝也に、影響がないはずがない。なにせ勝也と和辻は、ともに次郎が購入した『群書類従』を使って研究をしていたほどのだから<sup>(21)</sup>。

もつともそのことを勝也本人が認めた文章となると、おそらく次のひとつだけである。阿部次郎と和辻哲郎が

のちに仲違(四)いた関係からか、次郎が元気なうちに勝也が和辻との関係に触れることはなかった。

自分は縁あつてこの和辻さんと知り合い、その刺戟を身近かに受ける事になった。失意の中にあつた自分(四)に一道の光を与えて呉れたのは、この和辻さんであつたといつてよい。

和辻によつて見出した曙光とはどのようなものであつたか、勝也は記していない。しかし大学での苦惱から抜け出るのに役立つかもしれないなにかをそこに見出したからこそ、それは光となり得たのである。すると歴史家としての勝也の出發を考へる上でも、文化史家・和辻哲郎についてさらに見ていくことが必要となつてこよう。

\*

『日本古代文化』の初版序で、「この書が証明を要せざる公理として認容した二三の心理的法則」について読者の了解を乞うている。(五) その通りランプレヒトばりに心理学へ依拠したところも各所で発見できる。だがよく知られているように、和辻の作品は、一事件や一個人といった個性へと鋭い眼を注ぎ、それを情感の籠もつた表現で謳い上げる傾向が著しい。むしろ文化への着目という点を除けば、ランプレヒトの意図する文化史とはほとんど別のものとすら言つてよい。

こうなつた一因は、ランプレヒトの議論、とりわけ方法についての主張を、和辻が鵜呑みにはできなかつたことにある。ランプレヒトが惹き起こした論争は多方面にわたつたが、そのほとんどはかれに不利な展開となり、とりわけ方法論については完敗に終わったという見方が一般的であつた。論争の最中、ヴェインデルバント（一八四八〜一九一五）が、法則定立的な自然科学とは異なる個性記述的な歴史科学という区分を提唱、さらにその弟子・リッケルト（一八六三〜一九三六）が自然科学と文化科学（Kulturwissenschaft）という定式を用い、その論点を全面的に展開した。これらは、心理学を歴史学へ持ち込もうといつた試みをきびしく批判するとともに、歴史学における個別性の記述へ哲学的基礎を与えるものであり、そうした点に力を注いできた政治史を強力に擁

護するものであった。<sup>(19)</sup>

日本でも明治の末頃になると、ヴィンデルバントやリッケルトといったいわゆる新カント派の哲学がさかんに議論され始める。例えば、西田幾多郎が大正二年の『哲学雑誌』に寄せた論文「自然科学と歴史学」<sup>(20)</sup>は、リッケルトたちによるランプレヒトへの批判的言及にも触れながら歴史学へと考察を加え、その自然科学との差異を強調していた。新カント派に与することはなかったが、それらを十分に踏まえていた和辻である、ランプレヒトの所説でリッケルトへ論理的に対抗できるなどとは到底考えられなかった。では、かれはランプレヒトのどのようなところを評価していたのか。

それはかれの理論的達成ではなかった。<sup>(21)</sup> 歴史叙述が可能であるかどうかを常に顧慮せざるを得ない歴史家の立場で考え、そして実作を披瀝し、総括を試みている点にあると、和辻はいう。方法論ではなく文化史の実践者として評価しているのである。しかも「著者が厳密な科学的態度を取らうとするに關らず、その底に芸術家的な直観を隠してゐるやうに思ふ。そこに恐らく著者の優れた素質があるのであらう」と。

西田幾多郎は先の論文において、芸術と歴史の相違を、芸術は個性を把握して後に材料を求めるのに対し、材料を明らかにすることで個性を現すのが歴史である、とした。和辻はこれを引きつつ、しかし西田に従って個性の顕現こそ歴史の仕事であるとするとき、どこかで芸術と歴史との相違が消失する場合がありますと主張する。かくて歴史家にも芸術家の才能が必要とされてくる。「芸術家的な直観」を有し、いわば芸術家の才能をも兼ね備えた歴史家の存在を、和辻はランプレヒトに見た。

この讃辞がランプレヒトの意に沿うものかどうか、はなはだ疑問ではある。だが和辻はランプレヒトをそのような存在と捉え、そして間違いなくそこに自らを重ねていた。すなわち文化史家としてのあるべき自画像を描いていた。数年後、京都大学から赴任の打診を受けた際、倫理学ではなく「文化史といふ風な講座」に執着したのも、<sup>(22)</sup>

そう考えてくるとごく自然なことに見えてこよう。

すると、ある時期になってかれが日本の文化を研究しはじめたことは、まずはそれが文化史家・和辻哲郎にとつていかなる意味を持つていたのかから、理解される必要があることになる。そこで自著『日本古代文化』をめぐる本人の声を聞こう。<sup>(20)</sup>

著者は同書を、「直観と洞察の書」、「芸術と同じく創作だ」という。ランプレヒトをかれが評価したときと同様の語彙が見られ、自作に対する自負を感じ取ることができる。そしてそうした研究の意義をこう説明する。

日本文化の研究だけは、どんな西洋人が来ても恐ろしくない。この点では世界で一流のものが書ける。さうして日本が世界史上の名物となればなるほど、この研究は不朽の意味を持つ。世界の人が、明治大正の日本の哲学や文学を顧みないでも、私の日本文化の研究だけは読まないでゐられない時が来るといふやうな事も、考へられるのだ。

日本文化についてなら世界で一流のものが書ける。そしてその作品の価値は、世界史上における日本の重要性が増せば増すほど、大きなものとなっていく——そうした見通しのもと、和辻は日本文化を研究対象として選び取ったのである。しかも「一生この仕事ばかりやらうといふのではない」と言いながら。

動機ともいべき次元についてのこの説明は、日本を研究しようとしたこれまでの多くの人びとのそれとは大きく異なるものであるだろう。日本研究をそのみで自足したものとしてきた者とも、あるいは世界を視野に収めつつも、そのうちで特殊なものとして日本を理解してきた者とも違う。和辻においては、日本を研究することがそのまま世界へと繋がることになるという「幸福な」関係が想定され、その確信のもとに日本文化の研究がなされる。そしてこの想定を支えるのが、ランプレヒトのように、世界史のなかで日本の位置を重視する学者の出現であった。ランプレヒトにそれを可能にしたのが、現実世界における日本国の存在感の上昇にあったとすれば、そ

うしたものを前提にする和辻の発想も、当然のことながら、これまでにない新しいものということになるだろう。日本文化はまったく違う角度から、研究を意義づけられたのである。

なにかの拍子に日本人であることを強く意識したからといって、だれもが日本について研究するようになるわけではない。日本を研究対象とすると決断するためには、もっと具体的ななものがなければならず、和辻にとってそれは、世界のなかで自らの研究が占めることのできる水準に求められた。日本はそうした判断に基づき、文化史家・和辻哲郎により、戦略として一時的に選ばれたフィールドだった。

\*

自信に溢れた態度で日本というフィールドを和辻が選択した様子を眺めてみると、ふとこんな疑問が湧いてくる。和辻以前に日本文化の研究はなかったのか、と。

国史や国文のように日本のことを専門に研究する講座は大学にもあった。勝也もそうしたところで勉強していた。そして研究も数多く発表されていた。だが文化という言葉で、例えば、「心情、気分、言語、風習、芸術、学問、政治などの全体を包含」させようとし、その歴史について語ろうと試みる和辻にとってみれば、それらは所詮、技巧のほかに何物をも語らない美術史、死語の穿鑿のほかに尽くすところのない文学史、あるいは心理観察を欠いた政治史といった類にほかならない。日本の伝統はなおほとんど文化史的研究を経ているという言葉は、こうした認識に基づく。そしてランプレヒトなら政治史と一括したような「古い歴史学」が、日本においては史料の考証と客観性を旨としてきたことに対応する形で、和辻の提唱する文化史は、主観の介入を積極的に肯定する色彩を強める。それは「古い歴史学」とはもちろん、集団に着目しつつ法則の定立や普遍史の樹立を模索するランプレヒトのものとも異なる、独自の世界を形作っていく。

このような文化史の新しいさを強調する和辻のような考え方に対しては、批判もあり得た。例えば、ランプレヒ

トをコントやバックルの継承者とする見方があったように、これに倣って、文化史を、福沢諭吉や田口卯吉のいわゆる文明史論を継ぐものとして位置づけるといった見方も可能であるのだから。<sup>(26)</sup>しかし和辻はそうしなかった。それにはランプレヒトとの差を自らが自覚していたこととともに、文化と文明の断絶を当然としていたことも大きい。

文化という言葉が、武に対する「文による教化」という古典中国語の用法を離れて一般に流通していくのは、和辻が文化史を言いはじめるようになる僅かに前、ちょうど明治から大正へと移り変わる頃だった。<sup>(26)</sup>それこそ先述したヴィンデルバントやリッケルトら新カント派が受容されてくるなか、かれらが（自然に対して）用いるドイツ語 Kultur の訳語として選び取られていったのが文化だった。文化とは人類の心の辿りであり、人類の価値系統であるというこの時期の和辻は、まさしくそうした影響のもとにあつた。

これより以前、Kultur は、Civilization など一緒くたに文明と訳されてきていた。<sup>(26)</sup>大正二年に和辻が「日本歴史の文明的意義」についてのメモを残していたように、<sup>(26)</sup>かれもその時点では自覚的に訳し分けてはいなかった。だが、物質的・外面的な意味合いを持たされてきた文明は、新カント派の用法には相応しくないと徐々に判断されていく。すなわち文化は、まずは文明と異なるものとして、哲学に関心を持つ人びとのあいだから定着しつつあつたのであり、和辻もこうした流れに乗って、そして文化という言葉の新しさを活かすべく、新しい歴史学として文化史を提唱していく。いまでは教科書の片隅でひからびている印象しかないかもしれない。しかし、大正のはじまったこの頃、文化史は、新しい概念に基づいた新しい歴史学だったのである。

このように日本をフィールドとする文化史の新しさを強調しても、日本はほとんど、文化史的研究を經ていないと注意深く述べていたように、和辻は同志の存在まで否定したわけではない。かれが挙げるのは、木下杢太郎、津田左右吉、そして森鷗外。

友人である木下李太郎（太田正雄）へ「日本文化は汝を要す」と呼びかけ、医業の断念すら勧めたものの、和辻の思いはすぐには届かず、とうとう自ら日本文化史へと着手したことはよく知られている<sup>(20)</sup>。李太郎は不作為によって、日本文化史家・和辻哲郎を生み出したと言えるかもしれない。

津田左右吉との関係は早くから注目されてきた<sup>(21)</sup>。一部では誤解もあるようだが、この時期の津田の仕事は、歴史の学界を中心に広い範囲で注目されており、新著が刊行されるたびに書評が相次いだ。『史学雑誌』誌上で津田の著書を、「我が国史学界に永久に記念せらるべきものであらう」と評したのは、ほかならぬ大学院生時代の平泉澄<sup>(22)</sup>である。

当然のことながら、和辻も津田の著述に目を通していた<sup>(23)</sup>。それについて和辻はこう述べている。自分の上代史は、津田左右吉による古事記・日本書紀の本文批判を前提としているが、その上代文学批評には極端の反対に立つものである<sup>(24)</sup>。と。津田の基礎的な研究へ存分に敬意を払い、それに依拠しつつ、どうしても和辻が認めることのできなかつたのはどのようなところなのか。大正五年に洛陽堂から刊行された津田の著書『文学に現はれたる我が国民思想の研究』第一巻（貴族文学の時代）の和辻手沢本への書き込みを参照してみよう<sup>(25)</sup>。

日本には古代文化を見るべき文献不完全也。津田氏はその不完全を補ふに洞察を以てせず。その不完全を利用して古代人を罵る。／津田氏が古代日本人の心を見ないのはどういふわけか。支那文物の形式的模倣であるといふ見方で日本人の生を觀察しようとしするのは如何？

津田の研究法は明確である。『文学に現はれたる我が国民思想の研究』を続々と出版していった頃、自らの上代史の研究法について講演している。「我が上代史は記紀に記されたる事を以て始まる」。考古学や人類学などと歴史学とは、截然と区別を立てることが肝要であり、「要するに上代史の研究は文献其物の研究を主眼とすべきものなり」<sup>(26)</sup>。これに対し、和辻の論評は、それでは不十分であるとするのだ。史料がないと立ち止まるのでなく、

そこからさらに進もうする。その意味で、史料のある時代だけに研究を限ることを怠慢とし、史料なき時代へ、未開人と児童の心理学を援用しようとしたランプレヒトの忠実な継承者であった。ただし逆から言うとも、史料という籠は外れている。

ところで和辻が、津田の研究法では不十分とするのは、少ない文献から描かれた津田の批評が、かれにはあたかも古代の日本人を罵っているかのように見えたからにほかならない。それは和辻には日本人の心・生への無理解にしか見えなかった。同書のほかの場所にはこんな評釈が記されている。「制度がいかに実施せられたかよりも制度を造った心持を見よ」。そして「かかる人間的な弱さに対する同情なし」<sup>(27)</sup>。同情の欠如。津田に対するこうした印象は、和辻に独特なものではなかった。京都帝国大学の日本文化史講座担当者・西田直二郎も、津田の同じ本を読み、同情という和辻とまったく同じ言葉で、その欠如を指摘している。津田左右吉と、日本文化史を標榜する人びととのあいだにあつたこうした感覚の差は、両者の作品の違いを生み出していくことだろう。

最後に森鷗外について。和辻は、『渋江抽斎』と『寒山拾得』に論及する。つまり和辻はいわゆる史伝小説を一種の文化史としてしているのである。これは芸術と歴史のあいだに根本的な差を認めないがために可能となる態度である。もつとも和辻によれば、小説のなかで鷗外の作品が取り上げる人物たちは、個人としての偉大さも、文化史上の意義も、鷗外の労力に価するものとは思えない、先生は掘り出し物の興味に支配されているのではないかと、残念がる。

和辻の文化史は、津田左右吉はもちろんのこと、西田幾多郎から森鷗外までを視野に入れて構想されていた。いわば文化という新しい捉え方を梃子に、「古い歴史学」のみならず、哲学・史学・文学という学問分野の区割りから擦り抜けようという試みでもあつたのである。

\*

勝也の間近で出現した文化史家・和辻哲郎とはこうしたものであった。研究への筋道や、そのために必要とされる知識、それに阿部次郎の役割をも合わせると、これを教養派の歴史学と呼んでも誤りではないだろう。同じ時期に、同じような知的背景をもった人間が歴史を考察すると、概ねそうしたものになるという意味において、そのなかで和辻を周りの人びとと分けたのは、フィールドとして日本を選択したこと、そしてなによりその実作を次々と発表していったことにある。日本文化史を標榜し、実践していったことである。

ここで勝也の軌跡やそれによって培われてきた指向、あるいは大学における国史学との不適合といったことをもう一度思い起こしてみよう。ようやく二五歳になるかならぬかの勝也が、和辻によって切り拓かれた日本文化史へ強く魅かれたとしても、だれもそれを止めることはできない。しかもそれは遠くで起こった事件などではなかった。自らの目の前で、よく知る人物によってなされている事件であった。

その勝也は国史学専修の大学生であった。このことは、和辻から刺激を受けて日本文化史の実作を試みていくにあたって大きな利点ともなった。大学で史料の考証をきびしく仕込まれていたかれは、その面で新たな研鑽を積む必要はなく、専門性をそのまま活かせるのだから。かれには、日本文化史が、読書によって培われた自らの指向と、国史学でなされてきた学問との距離を埋める術に見えたに違いない。

だがそれにはもう反面がともなった。和辻は、先行する諸専門家の労作を基礎としたことを述べつつ、しかし「自分はこれらの多数な分科のいづれについても専門家としての権威を持つものではない」と告白する。ではかれの仕事はなんら価値を持たないのか？ さにあらざ、と和辻は否定する。「各の分科の研究が結局いかなる目的に奉仕すべきかを主張した」点で、十分意義を有しているはずだ、と。和辻の意を汲んで次郎兄も同じことをこう言っている。「和辻は国史や国文をやつたのではないから、細かな点で瑕が多いかも知れないが、それが却つて専門家

の刺戟になるだらう。新しい頭と眼を持った者の研究が必要な時代が来た。他の人たちが口ばかりで騒いでゐる間に、和辻が実行の方で先鞭をつけたのは愉快である<sup>(21)</sup>。

専門性へ敬意を表しつつも自らはそこから逃れ、専門によつて見失われがちとされる総合性を発揮できる、新たな頭と眼をもつた研究者——専門家とは特にその道に造詣が深いことであるとすれば、和辻も間違ひなくそうである。だが学問の制度化が進み、それぞれの学問分野について、専門家を養成するための「正規」の経路ができあがってくると、その経路に従つてきた者以外が専門家と自称することは困難になってくる。和辻は、専門というものに不可避的にまつわるそうした重苦しさから、あえて離れたところで、作業に着手し、実行していったのである。それは「専門家」でないからこそ意味があつたのであり、専門化を進める「古い歴史学」への批判を内包していたものであつた。

ところが勝也は、和辻のそうした立場までは踏襲できない。それどころか、まずは「専門家としての権威を持つ」仕事をし、「古い歴史学」の「専門家」ともいへべき国史学の教員からも認められるような論文を仕上げなければ、卒業すら覚束ない。失意の勝也にも確かに光は差し込んできた。しかしその光によつてかれの前に現れた課題の克服は容易なものではなかつた。課題を克服できるかどうか、その成否は、ひとまず卒業論文で判断されることになるだらう。勝也は卒業論文執筆にあたつて、これまで下宿していた余四男兄のところを出て、田端の光明院に移つた<sup>(22)</sup>。かつて次郎兄や魚住影雄も寄寓したことがある寺に籠もつて、卒論に集中したのである。

\*

勝也の卒業論文の題目は「僧兵の発生」<sup>(23)</sup>。大正期の帝国大学に提出された卒業論文を読む機会などそうあるものではないだらう。そこでまずは体裁から触れていきたい。

柿洪色の表紙で和綴じ。外題に「僧兵の発生」、「大正四年入学 史学科 国史専修 阿部勝也」とある。寸法は



勝也の卒業論文。表紙は渋柿色。

勝也と前後する時期に出された卒業論文を眺めると、ペン書きのものと毛筆のものがあり、したがって体裁も区々である。文体も同様。そうしたなか勝也の論文の外観は、かなり洗練された部類に入ろうか。

論文には審査表が添付されている。それによると、三上教授のもとに送付されたのが七年四月二十二日。次いで五月二日に萩野教授のもとへ送られ、一六日に閱了。黒板助教授は二〇日に、そして最後の田中教授は二六日に閱了している。このうち萩野はわざわざ貼り紙をして朱書きで講評を記した。

従前僧兵の題目を捉へて研究した人も数輩あつたが、此論文の如く、多方面より迫出して僧兵の發生を説いたものは未無かつた。論述の間に多少言足らぬ所もあり、贅もあるが、能く材料を駆使して、材料に役せられざる点は、著者の才力を見る事ができる。蓋し此問題研究の白眉であらう。

「白眉」といった言葉は、卒業論文に対してしばしば用いられるものだろうか。少なくとも萩野からは高評価を得たようである。なお、審査員に、専門がもつとも近いはずの辻助教授の名が見えないのは、かれが講座担当外

であつたためであらう。ついでながら文科大学の試験規程には、論文の提出期限は四月三〇日、口述試験の開始は六月一日とある。勝也は締切よりはやく論文を提出したことになる。

次に目次を掲げよう。下方の数字はそれぞれの開始頁数である。以下しばらく卒論の話が続く。よつてそこからの引用は本文中に頁数を記すことにしたい。

序論

一

第一章 僧兵の意義

三三

第一節 僧兵の概念

第二節 僧兵の起元（イマコ）

第三節 僧兵発展の過程

第二章 僧兵発生の第一過程

一二七

第一節 寺院の社会的地位

第二節 僧兵の要素

第三節 寺院の経済状態

第三章 僧兵発生の第二過程

二〇一

第一節 地方の紊乱

第二節 仏教内部に於ける勢力の分裂とその争奪

第三節 寺院生活の頹廢

第四章 僧兵発生の第三過程

二九五

第一節 中央権力の頹廢

第二節 社会生活と仏教との交渉 一

第三節 社会生活と仏教との交渉 二

結論

三八七

備考

三九九

目次からも明瞭なように、勝也の論文は、僧兵の発生について、三つの過程から叙述することが中心になっている。それぞれの過程がなにを扱ったものかについては、序論のなかで説明がある。第一―僧兵を構成する要素とそれを寺院内部に吸収することを得た財力がいかにして成立したか。第二―寺院は何故に武力を必要としたか、またそれらの人々は何故に兵力と化し得たのか。第三―寺院の兵力は何故に院政時代に僧兵として重要な意義を持ったのか。ここから分かるように、三つの過程は時系列に沿ったものではない。「時代の趨勢を一層明瞭に、一層厳密に理解せんとする」ため、あえて三つに分解したものであり(二三―六頁)、その意味で、理念的に構成されたものである。それが成功しているかどうかは置くとしても、こうした方法的な面にも注意を払って記された論文であることが確認できよう。

\*

方法の議論に入るより先に、そもそもなぜ僧兵なのか、論文に即して見ていきたい。まずは序論の冒頭から。

仏教が如何に日本歴史に交渉したかの問題は歴史上極めて重大な意味を持った問題である。夫は単に外面的に日本歴史の上に交渉して多くの重大な史的現象を引き起したばかりでなく、深く又大和民族内部の生活に迄喰ひ込んで、其処から新らたなる生活内容と、極めて重大なる社会的変動とを生み出す処の勢力となつて、隠然として大和民族の運命とその歴史的發展とを支配して来て居る。(一頁)

「僧兵の発生」は、仏教と日本歴史との交渉という問題からはじまる。そしてこの両者について、「今仮りに貴

族から武家へ、武家から平民階級へと次第に上から下へ、部分から一般へと移動してきた社会的勢力の変遷と、その間に活動した仏教との関係を見るも、如何に此の両者の間に必然の関係があつたかを考へなければならぬ」(二二三頁)と、やや修辭的に議論は展開し、焦点は僧兵へと絞られていく。これを修辭抜きで表現すると次のようなところになるうか。日本の歴史に重大な影響を与えた仏教について、それがとくに大きな役割を果たした貴族の時代から武家の時代への転換期を中心に、そのなかでもとりわけ興味深い僧兵の發生過程について検討を試みる云々。関連して二点、注釈を加えておく。

第一点は、勝也の問題設定が、仏教の果たした役割を頗る重いものと見積もることではじめて成り立つものであることについて。それ自体は十分に成立する見解であるし、奇異とするほどのものではないかもしれない。しかしかれの後年の仕事で、国学や神道を主たる対象としていたことを思うとき、やはり意外との印象は拭いがたい。これについては、大学における仏教関連の授業や、修学旅行での実見、それを増幅したかもしれない和辻との接触といった諸体験<sup>(26)</sup>もさることながら、日本における仏教を、西洋におけるキリスト教と重ねて見る視角が影響したことが考えられる。

もつともこのこともそう特異なことではない。問題はその程度である。その点で「此のローマとゲルマンとの関係を我が貴族と武家とに引き移して見る時、僧兵の問題は如何に此の法王権の問題と相一致して居るかを見なければならぬ」(二二二頁)とまで述べる勝也は、かなりの強さと言つてよい。西洋におけるキリスト教を念頭に、そこからいささか演繹的に、日本における仏教の役割をはじめから大きなものと前提してかかるところがあるだろう。そこに、カトリックの雰囲気のなかで生まれ育つた残映を認めるかどうかは、読者に任せたい。

この第一点から派生する形で、さらに二つほど指摘しておこう。

ひとつは西洋と日本との類似を実体的に捉えたことにより、その両者を包摂するような「一般的法則の探求

を必要とする」こと。そのためには社会学や人間の心理的問題についての研究が不可欠となる(二二―三頁)。そしてもうひとつは、一般的法則の存在を想定することにもなう史料へのまなざし。勝也によれば、僧兵を明らかにするに足る史料は十分とは言えない。「単に不完全なる史料に由つてのみ之を解決せんとする時は到底満足すべき解決を見る事は出来ない」として、不完全な史料に立ち止まるのでなく、法則を援用することでさらにその先へと進もうとする(二〇―三頁)。もともとこの論文の性質上、法則について深く立ち入ることはできなかったとも述べてはいるが、勝也の関心が那邊にあったかは十分に窺えよう。そして法則と史料にまつわる右のような態度からは、勝也が、ランプレヒト、そして和辻哲郎の文化史を正面から受け止めていたことがよく分かる。

第二点は、仏教と日本歴史というなから僧兵へと限定されていく経緯について。飛鳥時代の仏像でも、また江戸時代の檀那寺でも仏教と日本歴史との交渉について考えることはできるのに、なぜ院政期を中心とした僧兵なのか。このあたりの説明はとくにはなく、唐突の感が残る。その点について、むしろかなりの程度まで、僧兵とその時代への興味が先にあつたのではないかと、思われる節がある。

勝也は僧兵という現象に、「仏教と兵力なる極端に矛盾した二つの要素の結合」を見出す(二〇頁)。かれの僧兵への関心は究極的にはこの点にあつた。そしてかれにおいて、これはキリスト教と兵力、さらには宗教と兵力との関係という問題へと一般化されていく。勝也の導師の一人で、翻訳までしたトルストイが、そうした方面で盛んに言論を展開していたことも思い出しておこう。宗教と兵力という抽象度の高い関心から、僧兵という存在が浮上してきた面もあつただろう。

また随分とあとのもので、しかも卒論から四年後の大正十一年に刊行した自著『平安朝末期』(大鏡閣)について書かれたものではあるが、同書を著述した頃の心持ちを振り返って、「文化史を書きたいと云ふよりは、自分は寧ろ平安末期を書きたかつたのである」という言葉がある。<sup>(2)</sup>「千七百年の伝統を持つた過去は、遠く此の渦巻の

中に潮轆して来た一切の過去は、藤原氏の栄華も、望月の夢も皆此の灼熱せる溶炉の中にとろけて、新たに野人の胸に目覚めて来た世界が之に代らんとして居る……」（二九〇頁）。この時代の意義を論じる段になると、文章の調子すら変化するほどである。勝也はとにかくこの時代、そして僧兵を描きたかったのかもしれない。このあと発表していく論著も、大正期のうちはこの時代を扱ったものが多く、そうした論究を続けながら、新たな主題を探し求めていくことになる。

\*

勝也が描く僧兵は、やや窮屈な印象を読む者に与える。それはおそらく舞台の設定の仕方によるだろう。

前の引用にもあったように、勝也は、貴族から武士、武士から平民という文化の担い手の変遷を考えている。

これは津田左右吉の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』における時代区分、すなわち貴族文学の時代―武士文学の時代―平民文学の時代というのとまったく同じであり、平民が担い手となったのは江戸時代とする点も同様である（一八頁）。僧兵の発生がかかわってくるのは、そのうち最初の転換期である貴族から武士へというところである。

ここでは、貴族は京都・中央の旧勢力、それに対する武士は地方の新勢力という固定的な性格付けがなされている。そうした背景のなかで寺院と、それを拠点にする僧兵を配すると、どうしても地方の新勢力の側というところになる。よって僧兵と武家とはともに「行き詰まった文化と沈滞し腐敗した旧勢力とに対する新たなる力」とされる（二六〇七頁）。実に明解な図式と言えよう。ところが、これまた周知のように、寺院は貴族出の者たちによって門閥化が進んでいた。そうした面について勝也が無視するわけではない。だが最終的には、それらの者のなかにも地方出の者が少なくなかったとして、かれらに地方の新勢力という役を割り振ってしまう（一三〇四頁、一四一―五頁）。そのためせっかくの僧兵も、役どころは武家とほとんど変わりがなくなる。たとえて

言え、舞う者はかわつても、同じ舞を舞っているといった風情である。

また叙述の仕方もそうした感想を増幅する。僧兵発展の基本的な説明を施したあと、この点を明瞭にするために実例を抜粹するとして、そこから延々と三五頁にわたつて史料の抜き書きが続き、そのままこの章は終わつてしまふ(九二―二六頁)。史料を広範に収集したことを、審査する教官たちに示す必要のあつたことは認めるし、当時は未刊であつた興福寺関係の史料にもあたるなど、それに値する作業も実際に行つてゐる。この点は十分に評価されたことだろう。しかしそれらの史料が咀嚼されて本文の論旨に活かされてゐるとは言い難く、史料の博搜が進めば進むほど、かえつて明解な図式とのあいだの距離が目につきかねない。

ただし勝也の場合、この乖離を自らで認識したとしても、史料の探索不足や読み方の未熟という方向では理解しなかつた公算が高い。もともと僧兵についての史料は不十分であると考えていて、しかもその不完全なところは史料以外のもので補つていくという立場であつたからである。むしろ、史料を懸命に博搜しても論旨が大きくかわることはないという教訓を導き出したのではなからうか。

\*

ところで勝也はこの卒業論文の執筆にあつてどのような研究を参照してゐたのか。のちのかれの論文の多くと同じく、脚注等はないが、巻末の「備考」に一覧形式で以下のものが載つてゐる。書誌を補足して掲げてみよう。

池田晃淵『平安朝時代史』早稲田大学出版部、一九一五年

藤岡作太郎『国文学全史・平安朝文学史』東京開成館、一九〇五年

村上專精『日本仏教史綱』金港堂書籍、一八九八―九九年

大類伸『城郭之研究』日本学術普及会、一九一五年

奈良県編『大和志料』二巻・奈良県教育会、一九一四～五年

日本歴史地理学会編『歴史地理・近江号』三省堂、一九一二年

牧歌的な研究状況だったという見方もできるし、しかしそれにしても参照しているものが少ないという見様もある。ただし先述した津田左右吉の大著のように、目を通していたことが確実でありながら書名の見えないものもあり、備考は網羅的なものではないようだ。そしてここに晩年まで一貫する勝也の研究への基本的な態度を読み取ることもできるだろう。卒業論文を発展させたものと言ってよい『平安朝末期』では、この点を次のように記している。

自分は成るべく根本史料を使用して、兎に角一々の問題に対して、自ら突き当つて行くと云ふ態度を、取つて見た。此の事は固より冒険ではあるが、今の処、文化史の研究に於ては、夫より外に道がないと思つたからである。／尚研究の行き届かなかつた点は、夫々専門諸家の研究に依つて、補つてある。<sup>(28)</sup>

とにかくまずは史料に直接あたる、そしてそれができないところは研究で補う——このことは、他の専門研究者との見解の差異として表象される「獨創性」を第一とは考えないということであり、学会における位置づけを第一義的に考慮することはないということである。それはそうだろう、自己の完成の一環として、たまたま日本文化史を選んだのであつて、けつして「獨創性」を誇るためなどではなかつた。学会との距離のとり方も、次郎兄や和辻らとよく似ている。歴史家として真つ当な態度であると、いまでも好感を持たれるかもしれない。

ただし卒業論文では個別の論点で先行する見解に異議を唱える箇所もある。しかもそれが明示的になされていく点で、後年とは対照的ですからある。具体的には辻善之助への批判である。

辻は文科大学における講義「国史に於ける政教關係」において、良源を僧兵の創始者とする従来の説を否定した。「僧兵の起源」としてのちに『日本仏教史之研究』続篇に収録される論文の原型にあたる。<sup>(29)</sup>勝也はこれに挑む。

極めて確実なる史料から帰納された議論であつて、従来の妄説を否定するに足る事は勿論であるが、夫は如何なる範圍迄良源の人格を規定するものであらうか。又如何なる程度に於いてその人格と僧兵との關係を否定し得るものであらうか。此の事に対する博士の態度は少しく無雜作に過ぎはしなかつたであらうか（四八～九頁）。

良源の人格と僧兵との關係という問いを立て、史料引用を交えながら、良源の時代から僧兵の活動が顕著になつたことと、かれが僧兵に寛容であつたことは確かであり、良源と僧兵のあいだに密接な關係があるとしてきたことも理由なきことではないとする（六〇頁）。第一章第二節「僧兵の起元」は辻への批判を導きの糸にしたばかりか、ほとんどそのみで埋まつている。

しかも辻への批判はここだけではない。院政時代の信仰について、「単に遊戯的であり、享樂的であつたとのみ論ずる事は、充分當を得たものと云ふ事は出来ない」とわざわざ述べている（二三八四頁）。名前こそ挙げていないが、「遊戯的」「享樂的」という評価が辻のものであること明らかであり、實際にこのあたりの論述を活字にした際には、辻の論文を挙例している。<sup>(四)</sup> これらを見る限り、勝也もある程度までほかの研究者との關係を気にしていたことが分かる。

だがこれに類した記述は、卒業論文執筆からしばらくすると、かれの文章からほとんどまつたく消える。自己の完成を目的として学問を営んで居るのであるから、その方がより目的に忠実であると言うことができ、その意味では、後年になるほど、かれの学問は、自己の完成という目的へと純化していったと評することもできよう。

しかし、史料へ自らで突き当たつた結果もたらされた勝也の「読み」を、どのように「評価」できるかという問題は残る。もう少し分かりやすく言えば、勝也の自己完成に寄与したという以外に、読者はその仕事になにを見出すことができるのか、ということである。文化史は、研究の評価とはいかなることなのかという、根源的な

問いをも提起したのである。

またこの点とも関係するが、二頁前で引用した箇所にも、とにかく史料に自らで突き当たっていくが、研究が行き届かない点は「専門諸家の研究」によるとあるのも気になるところである。これの載った著作が、日本文化史の通史の一卷であったことも考慮する必要はあるだろう。だがあたかも自らを専門家の外に身を置く者とするかのような物言いは、卒業論文にもある。

問題が広汎に亘つたのと、主として総合を試みようとする態度を取つた事とのために、充分特殊の材料を辿つて、特殊の問題に深く立ち入る事が出来なかつた。従つて時々不徹底な解釈と独断とに陥らなければならぬ場合遭遇した。

和辻のものと言われれば、そのまま肯きそうな内容の文章だが、これには以下の続きがある。「一面又辻博士の講義「国史に於ける政教関係」、黒板博士の講義「鎌倉時代史」、萩野博士の講義「平安朝時代史」等に負ふ処が多かつた」(三九九頁)。研究の行き届かなかつたところは専門家による大学の講義で補つたと言わんばかりである。自らはそれとは異なる総合を試みる者であるという意識はかくも強く、そして和辻らの文化史にかくまでも忠実だつた。

\*

大正七年五月二三日木曜日、卒業論文の梗概発表会を兼ねた国史談話会が行われた。<sup>(22)</sup>「凡そ卒業論文は、当該教授の外一切之を知るに由なかつたといふことは、一恨事ではなかつたらうか。そして人も之を懲慚せず、又自ら進んで解放的態度に出でなかつたのは、余りに伝統的固陋に捉はれたる退嬰的方面ではなかつたらうか。こうした考えのもとに発案された新しい試みであり、修学旅行の復活や国史談話会の改革といった動向と連動した企画であつたらう。国史界の権威を一堂に網羅しようとの幹事の目論見は実現しなかつたものの、田中教授・辻助教

授のほか、幸田成友、中村孝也、東恩納寛淳、村上直次郎らが列席した。

卒論提出者も全員出席、<sup>(23)</sup>「各自の論文題目を掲げて、序論より結論に至るまで、章節に亘る内容を、奥深く腹の底に蓄へし力のある又熱のある音声を以て、明に論じ尽して、作成の動機、題目の意義、而て作成の結果など、徹底的に披瀝せられて余蘊がなかつた」という。「最後に田中教授は批判的総評ともいふべきか、一々簡明直截に莊重の言を以て批評せられた」。田中義成の評として伝えられているのはこのときのものであろう。平泉を評して曰く、「文に敏にして弁に敏なり」。勝也を評して曰く、「文に敏にして弁に咄なり」と。<sup>(24)</sup>中学時代から弁論大会でな

らした平泉に弁では勝てなかつたが、文では評価されたということだろう。<sup>(25)</sup>  
勝也はこの卒業論文をもつて大学を無事に卒業した。卒業時の席次は三番。三年次に特待生であつた平泉・藤田の後塵を拝することになつた。なお、主席の平泉は恩賜品——銀時計——を受けている。

\*

卒業後の九月二六日、明治神宮造営局属となり、内務省神社局の属を兼任した。<sup>(26)</sup>月俸四五円。二〇世紀最初の年に通いはじめてから一八年に及ぶ学校生活に別れを告げ、官吏の世界へ足を踏み入れることとなつた。

文学士の就職難には勝也も苦勞した。まだ卒論を執筆していた三月二四日、「四月から五時間づゝ中学の口がある」と次郎兄に伝えている。また一時期、日本刀研究家としても名高い東京帝国大学工科大学教授・俄国一の助手を務めたという証言もある。<sup>(27)</sup>しかし結局のところ、三上参次の世話で、<sup>(28)</sup>判任官に納まつた。

明治天皇が亡くなると、天皇を記念する事業計画が次々と現れた。そうしたなか、多くの記念事業を吸収していく形で、明治天皇を祀る神社の創建を目指す運動が中軸となつていく。大正四年五月、神社の創建が告示され、その実施を担当する機関が置かれる。明治神宮造営局である。

内務省に置かれた明治神宮造営局には、神社造営に必要な各分野の人材が集められた。そのなかには歴史的な

調査・考証に携わる人びとも含まれ、勝也の先輩にあたる萩野仲三郎（明治三〇年国史卒）や宮地直一（明治四一年国史卒）が参事として勤務していた。また国史の主任教授であった三上参次は、萩野由之ともども、同局を監督する明治神宮造営局評議委員会の委員を務めていた。そもそも明治神宮という異例の社名について、「先例」を探し出しつつ、それを「新例」として積極的に肯定し、専門家としてお墨付きを与えたのは、三上・萩野・萩野の三名であり、国史学と明治神宮とは深い繋がりがあった。そこに同局属兼内務省神社局属であった八束清貴（明治四五年国史卒）が掌典として宮内省へ転出することになり、勝也に声がかかったのだろう。

この年は就職以外にも、勝也には大きな変化があった。五月一〇日の次郎兄の日記。

夜明日の準備をしてゐるところに勝也来る。山寺のよしさんを貰ふことにせる由。

よしさん、すなわち斎藤芳との関係は、勝也作の小説「赤い影」をもとに、前号で検討した。中学三年の勝也の演技に涙する芳さんに気付いたことをきっかけに、二人はいつのまにかお互いを意識しあう仲になっていた。大学が長い休みに入るたびに帰省していた勝也は、卒業を機に結婚を考える。すでにその二年前、余四男兄が大学を卒業してまもなく、芳の姉・八重と結婚しており、主だった親類の賛同も得ていたはずである。

ところが勝也の周りに不幸が相次ぐ。六月二九日、叔父の堀礼治が台湾にて危篤との電信が到来、そのまま逝去してしまう<sup>(2)</sup>。礼治は竹岡周禎の末子だが、姉であるあい夫婦の養子となつて堀家を継いだ。礼治にはいくらかの資産と、九重と千代子の二女があった。また勝也兄弟の母・ゆきをはじめとする竹岡周禎の子供たちのあいだには、竹岡家を再興したいという意向もあった。家を継いだ滋松の早世により家が途絶えていたのである。明治三五年頃には、次郎と九重が一家を成し、竹岡家を復興させることが目論まれた。だがこの計画はうまくいかず、大正二年には次郎でなく三也が九重と入籍し堀家に入った。このため竹岡家の再興は勝也に委ねられ、礼治は勝也の学資の面倒をみることとなった。堀礼治の死は勝也にとって単なる叔父の死ではなかった。



勝也の結婚記念写真。上段左より余四男、三也、勝也。中段左より八重、恒、斎藤しげよ、わか、竹岡芳、次郎

このこともあつて結婚の話はすぐには進まず、まずは手続きが進められた。七年十月七日に絶家の再興が、ついで二三日には両者の婚姻届がなされている。またこの頃までには勝也も田端の光明院から牛込区原町（現在の新宿区牛込原町）へ転居している<sup>(29)</sup>。叔父の死の後始末も一段落した年末には、東京にいる四人の兄弟——次郎・三也・余四男・勝也——で晩餐をとにした<sup>(28)</sup>。こうして落ち着きを取り戻したように見えた矢先の正月二三日、今度は三也の長男、すなわち勝也にとっては甥にあたる明純がジフテリアで世を去った。立て続けに親類を死が襲う。

ようやく身内だけで結婚の宴が開かれたのは八年四月一九日、次郎邸でのことであつた。翌日、一同は神田の江木写真館に出掛け、記念撮影を行った。人物を多く輩出した阿部一族の多くが写っているものとして、諸本に転載されているのは、このとき撮られたものである。写真全体から漂うどうしようもない寂しき、少なくとも結婚を

祝つての写真とは思いがたい雰囲気は、祝い事に前後して起きた不幸な出来事が写り込んだもののだろうか。この年の十一月一日には次郎もまた長男・晃を失った。

\*

結婚の内宴から三か月ほどした七月末日付で、勝也は明治神宮造営局兼内務省神社局属を退いた。ただし嘱託として神社局にとどまる。「神社に関する調査事務を嘱託」と辞令にはある。<sup>(24)</sup>

六月になされた官制改正において、神社局では、属の増員のほか、考証官・考証官補と嘱託が新設された。<sup>(25)</sup> 考証官（奏任官）には参事であつた荻野伸三郎と宮地直一が横滑り、その補助をする考証官補（属・判任官）には太田亮（明治四三年神宮皇学館卒）と西村為之助（大正八年東大選科卒）が新任。そして嘱託には、属から勝也が異動、もう一名を京都帝国大学図書館司書であつた清原貞雄が埋めた。<sup>(26)</sup> 嘱託は、勅任―奏任―判任という官吏の体系から離れている分、勤務時間や仕事の内容といった点で、より調査・研究に専念できたようだ。待遇も決して悪くはない。<sup>(27)</sup> 勝也は新たな身分と新たな同僚のもと、これまでより恵まれた環境で勉強を続け、論著を発表していくことになる。

勝也が公刊していった諸研究はいくつかに分けられる。まずは卒業論文の延長上にあるもの。その一部を発展させた最初の活字論文「平安朝末期の信仰」<sup>(28)</sup>や、「恵心と法然」<sup>(29)</sup>などである。これらは京都の史学地理同致会が発行する雑誌『歴史と地理』へと発表された。学会活動に熱心でなかつた勝也とこの会との接触は、京大出身でしばしば同誌に論文を寄せていた清原貞雄を介したのもしか考えられない。神社局の組織改編は、勝也に、大学とも、次郎兄を経由したものと違ったネットワークをもたらした。しかもそれは関心を共有していただけでなく、活力に富み、これまでにない企画を打ち上げる。日本文化史にかかる通史の刊行である。

各人が一冊ずつ分担し、それを集めて通史とする出版形態も目新しくはあつた。だがこの叢書のなによりの特

徴は、日本文化史を謳ったことにあり、その点でまさに「本邦初」の試みであつた。全巻を通じた「総序」で、清原貞雄はこう述べる。「今日進歩した歴史家の間に文化史の必要と可能とを疑ふ者は無い」、それどころか文化史こそが歴史であるとする見方も最近では勢力がある、と。さらランプレヒトらによる日本文化史研究の企てなどにも触れながら、あえて日本国民による日本文化史の創出を提唱する<sup>(20)</sup>。こうした「進歩した歴史家」による『日本文化史』シリーズの著者は、清原を含めてほとんどが三十歳代、竹岡ら数名が二十歳代と、若手で構成されていた<sup>(21)</sup>。もつとも先のネットワークに依拠した関係上、全一二冊のうち平安朝で三冊を占めるなど、ややバランスを欠いたものとなつた<sup>(22)</sup>。

勝也は『平安朝末期』を担当した。卒業論文以来の研究の集大成であり、これまでの成果を存分に活かした作品になつている。『日本文化史』のなかでもとりわけ評判が良く、その後もたびたび復刊されたことは、(上)で触れた通りである<sup>(23)</sup>。また本書の評価も一因となつて、大正一二年四月には法政大学予科教授に就いた。またこれに前後して、牛込の原町から池袋へ転居している<sup>(24)</sup>。

法政の予科は、野上豊一郎が科長となり、多彩な人物を招聘していた。例えば大正一五年度の予科教員には、勝也のほか、英語に呉茂一・林達夫・森田米松(草平)、ドイツ語に内田栄造(百閒)、フランス語に豊島与志雄、国語に土屋文明といった名が見える<sup>(25)</sup>。予科教授といつても、勝也の場合は現在の専任教員にあたるようなものではなく、手当も神社局囑託とそうかわりはなかつた。しかし勝也はこれをきっかけに、仕事の比重を教職へと移していく。東京女子大学や立教大学、法政大学の文学部や高等師範科、武蔵高等学校と出講先を増やす一方で、大正一三年一二月には神社局を辞す。かれの志望は明確になつてきた。

\*

やや話が進みすぎた。もう一度結婚当初に戻ることにしよう。

勝也は僧兵にばかり係わっていたわけではなく、本務である神社に関する調査にも真摯に取り組んだ。祭事の拝観記にはじまり、<sup>(26)</sup>神社を扱った研究を徐々に生み出していく。神仏分離や明治初年の神社行政について、神社局の内部文書を用いて復元した論文などがそれである。<sup>(27)</sup>ほかの論文と比べると、極めて「実証的」な手法で事実を明らかにするこれらの作業を通じ、勝也は、明治維新という変革を、社寺に着目して捉えるに至った。そしてこのことは、そのあとの研究の展開に決定的ともいえる重要性を持った。そこから系譜的に遡るといふ作業に勝也が着手したからである。

明治維新を社寺から見れば、神仏分離と排仏毀釈が着目されることとなり、そこに国学の影響を見れば、国学者について考えていく必要が生じていく。こうして勝也は国学者を中心に江戸時代の検討をはじめていく。平安朝末期から大きく離れたことのなかった勝也にすれば、未知の時代であり、まさしく新たな課題であった。

ところで国学者という存在は、過去のテキストを学ぶことを介して、新たな価値を樹立していこうとする人びとである。よって国学者を考察の対象とするためには、かれらが生きた時代のみならず、もう一段遡って、かれらが復古するに値するとした時代についてもまた勉強していかななくてはならなくなる。<sup>(28)</sup>こちらは平安朝末期をはるかに飛び越え、さらに古い時代へ足を踏み入れることになる。こうして勝也の研究領域は、平安朝末期を超えて大きく拡がっていく。その中間決算として、かつて兄弟総出で支えた雑誌『思潮』の後身といつてよい『思想』に「維新の改革と中世否定の運動」(大正一三年)<sup>(29)</sup>を発表する。

他方で新たな領域への展開は、これまでの研究へも変化をもたらす。卒業論文から『平安朝末期』に至るまで、研究の主軸を構成してきたのは一貫して仏教であった。西洋におけるキリスト教と相同な役割を日本で果たしたものととしての仏教であった。そこへ、国学に抛りつつ、明治維新を起点に、近世と古代を往還することで形作られたより広い時代を覆う歴史像が出現した。どこかで両者の関係を突き詰めて考えざるを得なくなるのは当然の

ことだろう。勝也は神仏習合という現象を着目することでこの点を深めていった。「本地垂迹説の適用と神々の觀念の変動」はその成果である。

国学研究の進展がこれまでの見解に変容を迫っていった様子は、かれがこの時期にいくつか記した時評のような文章からも窺える。神社局の外郭団体である神社協会の機関誌『神社協会雑誌』に載せた論説群である。そのうち最後のものとなった大正一三年七月のものは次のような内容である。タゴールの中国来遊をきっかけとして、「一体垂細亜的とは何であるか」との設問を勝也は掲げる。かりに仏教を核と考えたとしても、中国には儒教があり、日本には神道がある。「垂細亜的であると同時に、各民族の精神が濃厚に是等の文化の中に含まれて来て居る」。「日本人は今少し日本人自らの中に沈潜し、その必然性を日本人自らの中に見出して新に此処に出発しなければならぬ」。

ここで語られているのは、神道を考えることはいかに意義付けられるのか、である。神道から出発することは、勝也にとつて当然の前提ではなく、現にかれは仏教に着眼するところから研究をはじめていた。アジアの多民族性に着目して、その相互の差異から日本が理解できるとし、その差異にあたる部分を神道という言葉で表現することで、はじめて神道は真摯に向かうべきものとなる。そこにおいて神道は日本的なるものの異名になる。それこそかつて国史を志したときと同じような遠回りをして、ようやく神道は研究対象となる。そしてかつて光の西洋から暗き自らの足許へと視線を移させ、国史という跳躍にも一役買ったタゴールは、いまやそれとの差異で日本的なるものを映し出す鏡となった。

ところが比較に基づき、日本的なるものに神道という表現を与えた上で、しかも日本を明らかにしようとするならば、どうしてもまず研究すべきは神道となってくる。日本文化史でなによりも考察すべきなのは神道ということになり、これまでの仏教を軸に据えた仕事の意義は大幅に低下する。神社局に職を得たことを契機とする新

たな学問領域への展開は、これまでの仕事の再検討を促し、さらには、今後の方向をも規定していくことになる。『思想』に発表した諸論文をもとに、九州帝国大学への赴任直後に刊行された二冊目の著書『近世史の発展と国学者の運動』<sup>(26)</sup>は、まさしくその分岐を画すものといえよう。その「序」で、荻野仲三郎・宮地直一・清原貞雄の三名にだけ謝辞を捧げ、はじめて自分にこの問題に対する暗示を与えてくれた人物と記していることは印象深い。大学を終えて十年近くが経ち、すでに新たな視野を獲得したのだ、もう『平安朝末期』でもあるまい——おそらく本人は強くそう思ったことだろう。九州への転居もその思いを高めたかもしれない。そして九州に来て以降の勝也は概ねその決意に従っていくことになるのだが、修業時代までを扱う約束の「竹岡勝也の肖像」は、これにて幕となる。

\*

\*

肖像にまともは似合わない。ただ余白に感想を書き込む程度なら、許されるかもしれない。

冒頭に引用したエピグラフを憶えているだろうか。ここにきて、その意味するところも、ようやく分かりかけてきたように思われる。

「自分は果して歴史家といわれるであろうか」。これは韜晦ではない。歴史学へ関心を持ったものの、現に行われていた研究に違和感を禁じ得なかつた勝也は、自らの関心に忠実な形で、同時代の空気へ敏感に反応しながら、自己の学問を形成していった。日本文化史という名をまとつたその学問は、専門化していく歴史学への批判を重要な動機としており、文化という概念を梃子に、専門化された諸研究の総合を目指し、哲学・史学・文学という明治以来の学問区分に挑んだものであった。

勝也はある講演でこんなことを言っている。

明治以後の学問は一つの方法として分科といふ方法を採つたのであります。哲学に於て、科学に於て、其他の種々の部門にきまして各々繩張をまうけて、その中にとど籠りすぎたのであります。(中略)しかし本来学問はばらばらのものでなく、互に連絡されて一つになつた時に、命となり、生きた学問となるのであります。明治以後の学問はこの事を忘れて、次第に人間とのつながりをうすくして小範圍に於ける学問に墮落して来たのであります。この学問は国民に働きかける事も弱く、新しい文化を産み出す力もないのであります。<sup>(28)</sup>

こうした考えのもと、自己の完成を目標に歩み続けてきた勝也にとつて、自分が世に言う歴史家でないのは当然であり、またそうでなければならなかつた。さらに言えば、いかなるものであろうとも歴史家にとどまつてはならない——そうした矜持をこそ、感じとるべきなのではあるまいか。

だが、専門化の波はいまもとどまることを知らない。勝也のように、そこから抜けだそうとする幾多の試みを経てなおそうなのであり、そうした試みへの期待と失望が幾度となく繰り返された果てに現在はある。だが専門化の進展とそれへの抵抗／逸脱を繰り返すほか道はあり得ないとするならば、自覚的にそのことを追求した最初の実践ともいふべき文化史という冒険や、その中心人物の一人である竹岡勝也を考える作業は、けつして無駄ではない——そう信じてみたい。

\*

なお、本文の最後に「附 竹岡勝也年譜および著作年表」を予定していたが、すでに大幅に紙数を超過していることもあり、割愛することとした。そう遠からぬうちに別の媒体で公開したいと考えている。この点、お許しをいただきたい。

## 注

番号は連載を引き継ぎ、書誌等も前号までに注記したものは再び詳記することはない。

- (139) 『東京帝国大学一覽・従大正四年至大正五年』東京帝国大学、大正五年二月の「学科及授業規程」による。ただし次年度から規程が改定され、国史学専修も二年次開始までに届ければよくなった。なお、哲学・史学・文学の三学科の下に置かれていた専修学科は次の通り。哲学科―哲学・支那哲学・印度哲学・心理学・倫理学・宗教学・美学・教育学・社会学。史学科―国史学・東洋史学・西洋史学。文学科―国文学・支那文学・梵文学・英吉利文学・独逸文学・仏蘭西文学・言語学。
- (140) 「卒業生氏名」、『第二高等学校一覽・自大正四年至大正五年』第二高等学校、大正四年一月、二六九頁。もつとも履修科目等にはほとんど違いはなく、もっぱら心づもりの問題であつたようだ。
- (141) すでに東北・九州の両帝国大学が存在していたが、前者に法文学部が設置されるのは大正一一年、後者のそれは大正一三年のことである。
- (142) 平泉澄のもの。若井敏明『平泉澄』ミネルヴァ書房、二〇〇六年、六頁。
- (143) 高力得雄「第廿一回史学科談話会」、『史学雑誌』二七―一、大正五年一月、九六―七頁。
- (144) 『東京帝国大学一覽・従大正四年至大正五年』東京帝国大学、大正五年二月による。なお、京都帝国大学でも史学科の不人気は変わらない。大正四年入学生は、哲学科一九名、史学科八名、文学科一七名。『京都帝国大学一覽・自大正四年至大正五年』京都帝国大学、大正五年二月による。
- (145) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』資料三、東京大学出版会、一九八六年、四八三―五頁によつた。もつともすべての時期にわたつて哲・史・文の三学科制がとられていたわけではなく、本文中の数値も、適宜換算したものである。
- (146) 三木清「読書遍歴」、『三木清全集』一、岩波書店、一九六六年、三八八―三九〇頁。
- (147) 例えば、勝也入学の年の『史学雑誌』第一号を見てみると、論説が「松平定信入閣事情」と「倭寇と朝鮮の水軍」、新刊紹介で『独逸対列強の抗争』や『戦争と媾和の歴史』といった書目がとりあげられている。哲学・文学系の雑誌との違いは歴然としていよう。
- (148) 『帝国文学』二三―一〇月号、大正六年一〇月。
- (149) 渡辺吉治(一八九四―一九三〇)「文科大学の為に弁ず」、『帝国文学』二四―二月号、大正七年一二月。
- (150) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一七八―九頁。

- (151) 以下、四高時代の平泉澄が記した文章については、若井敏明『平泉澄』一四〇二頁によった。
- (152) 『東京大学百年史』資料二、一二〇九頁。龍肅「国史学第三講座」、『史学雑誌』二六一一、大正四年一月、一〇七頁。
- (153) 卒業論文における注記による。卒論については後述。
- (154) 大正五年になって文科大学の規程が改定され、卒業要件などにも変化があった。新規規程は、附則の削除や規程の内容その他から、在学生へも適用されたと考えられる。よって規程改定時に在学中であった勝也に関するここでの記述も、新規規程に基づいて行つた。『東京帝国大学一覽・従大正五年至大正六年』東京帝国大学、大正六年三月。
- (155) 竹岡勝也「歴史家への歩み」、『古代文化』二一五、七二頁。
- (156) 平泉澄「本郷時代の想出」、『古代文化』六一一、一九六一年、六頁。
- (157) 「会員動静」、『史学雑誌』二六一三、大正四年三月、一二二頁。
- (158) 「入会」、『歴史地理』二四一四、大正三年一〇月、一一六頁。なお、勝也が同会に入るのは、卒業後の大正八年のこと。「会員動静」、『歴史地理』三四一六、大正八年二月、七五頁。
- (159) 谷森饒男「国史談話会」、『史学雑誌』二六一二、大正四年二月、一〇九〇一頁。「国史談話会」、『歴史地理』二七一、大正五年一月、一二八〇九頁。
- (160) 「第三十一回読史会」、『史学雑誌』二七一三、大正五年三月、一〇九〇一三頁。このとき学生出席者は平泉澄と石田幹之助の二名。龍肅「本会第一八回大会」、『史学雑誌』二七一四、大正五年四月、一一七〇二三頁。
- (161) 「会報」、『史学雑誌』二七一〇、大正五年一〇月、九五〇六頁。学生委員は、留任の原随園に、新任の高力得雄と平泉の三名。
- (162) 高力得雄「国史談話会」、『史学雑誌』二七一二、大正五年二月、六〇〇二頁。
- (163) 吉田東伍「庄園制度之大要」と本多辰次郎「勤王論之発達」の紹介が最初である。『史学雑誌』二七一二、大正五年一二月、八一〇二頁。
- (164) 例えば「史学会規則」によると、委員九名のうち、三名は評議員が兼務、残りの六名は史学会会員で、東京帝国大学文科大学史学科卒業ないし在学のものとし、それ以外の者を選ぶ場合には評議会の議を経る必要があった。
- (165) 『東京帝国大学一覽・従大正六年至大正七年』東京帝国大学、大正七年二月、附録四九頁。史学科では桑田六郎（東洋史）、藤田亮策（国史）と平泉の三名。

- (166) 阿部勝也・浅野長武・板沢武雄・園下大慧・仲里朝章・藤田亮策・藤本了泰「文科大学国史科修学旅行報告」、『史学雑誌』二八一―二、大正六年二月、九三―一〇四頁。名前の掲載は五十音順。分担箇所等是不明。
- (167) 「私は夫から一人で姫路に行き、姫路に二晩、神戸に一晚宿つて歸りに四日市に廻り(中略)今日東京に歸つて来た処です」。足を留めたのはいづれも親類がいる場所。大正六年四月七日付阿部七郎右衛門宛阿部勝也書翰、松山阿部記念館蔵。
- (168) 平泉澄「本郷時代の想出」、『古代文化』六一、七頁など。
- (169) 平泉澄「座管見」、『史学雑誌』二八一―二所収。同「頼朝と年号」、『史学雑誌』二八一―〇所収。同じ二〇号には、勝也らと同期の藤田亮策が大類伸の演習に提出した論文「ゲルマンの交通貿易」の第一回も掲載されている。なお、平泉が学会誌に寄せた最初の論文は、『歴史地理』二九―一、大正六年一月より連載の「郡上と穴馬」である。
- (170) 竹岡勝也「読書と人生」、『根芹』一八〇頁。
- (171) 注(155)に同じ。
- (172) その人となりについては、短文ではあるが、次のものが見事に描き出している。山崎正一「伊藤吉之助先生管見」、『理想』三三三、一九六一年二月。
- (173) 阿部次郎「雑記」、『思潮』一一一、大正六年五月、一五二頁。全集未収録。
- (174) 阿部次郎日記・大正四年一月二日に「四十になるまでの事を考へる」として挙げられた七項目のなかに次のようなものがある。「その間社会と接触する方面は教育者若くは批評家たるべし、(岩波から出る雑誌の主幹となること)」。『阿部次郎全集』一四・一三六頁。このときより一年半後にはそれを実現したことになる。ときに次郎三五歳。
- (175) 大正一三年三月十七日付和辻哲郎宛西田幾多郎書翰、『西田幾多郎全集』二〇、岩波書店、二〇〇六年、八八頁。
- (176) 山本芳明『文学者はつくられる』ひつじ書房、二〇〇〇年など。
- (177) 生松敬三「雑誌『思潮』解題」、『思潮』復刻版』別冊、岩波書店、一九八一年。
- (178) 阿部次郎日記・大正六年五月八日、『阿部次郎全集』一四・一九二頁。Anhängerはドイツ語で信奉者ほどの意。
- (179) 阿部余四男「個体とは何であるか」、阿部勝也「宗教と道徳」とともに『思潮』一一一、大正六年五月。勝也のものは「独逸倫理協会に対するトルストイの返答」を訳したもので、一一三、大正六年七月まで連載。
- (180) 阿部次郎日記によれば、四月二〇日、五月一六日、六月一九日・二〇日などに訂正を加えている。『阿部次郎全集』一四・一九

〇頁、一九三頁、一九八頁。

(181) 「宗教と道徳」のほか、勝也訳のものは、「理性と宗教（トルストイ）―問者某に答ふる書翰」、「思潮」一一八、大正六年一月。ただし七年一〇月には、勝也の原稿を次郎が没にし、急遽、小宮豊隆に頼んだことがある。時期からすると、この原稿は、勝也の卒業論文と関係があるとも思われるが、推定の域は出ない。阿部次郎日記・大正七年七月一日・一七日、二五日、「阿部次郎全集」一四・二四三頁、二四五頁。

(182) 山口輝臣「大正時代の『新しい歴史学』」。

(183) 湯浅泰雄「和辻哲郎―近代日本哲学の運命」ミネルヴァ書房、一九八一年。苅部直「光の領国 和辻哲郎」創文社、一九九五年など。

(184) 上原専祿「カール・ランプレヒトの生涯と業績」同『歴史学序説』大明堂、一九五八年など。

(185) 以下はランプレヒトの死に際して書かれた文章群によった。主なものは以下の通り。阿部秀助「現代の史学と『ランプレヒト』」、「歴史地理」二六―二、大正四年八月。石橋智信「曩に逝きし前萊府大学総長ラムプレヒト氏の東亜学上の学説及び事業」、「東亜之光」一〇―八、大正四年八月。新見吉治「嗚呼ラムプレヒト教授」、「学校教育」二一九、大正四年九月。坂口昂「ランプレヒトを憶ふ」、「史林」一一四、大正五年一〇月。

(186) 新見吉治「嗚呼ラムプレヒト教授」、「学校教育」二一九、六七頁。

(187) 坂口昂「ランプレヒトを憶ふ」、「史林」一一四、一〇八頁。

(188) 注(57)に同じ。ただし「思潮」から引用したため、表記が一部異なる。

(189) 「会員動静」、「史学雑誌」二八一五、大正六年五月、一三一頁。上野直昭の紹介により、原善一郎・矢代幸雄とともに入会している。原は前注の乙君。

(190) 「この書は大正六年の五月、二三の友人とともに奈良付近の古寺を見物したときの印象記である」、「古寺巡礼」改版序、「和辻哲郎全集」二・三頁。二三の友人とは、原善一郎ら。

(191) 阿部次郎日記・大正六年四月二六日、「阿部次郎全集」一四・一九一頁。

(192) 和辻哲郎『日本古代文化』初版序（大正九年）には以下のようにある。「この書の成立について、とくに阿部次郎君に感謝しなくてはならない。君はその同情と洞察とソクラテス的な助産術とによって、しばしば自分の考えの開展を助けてくれた。」和

辻哲郎全集』三・一二頁。ただしこうした表現は、改訂版序(大正一四年)からは削除される。

- (193) 「群書類従を買ふこととす」とあるのは、『阿部次郎日記・大正五年七月二三日、『阿部次郎全集』一四・一六一頁。また大正六年九月二四日付和辻哲郎宛阿部次郎書翰、『阿部次郎全集』一六・一三九頁にはこうある。「群書類従は禁秘抄の部は要らないと云ひますからその分はゆつくりお使い下さい。その代り釈教の部二冊と大日本仏教史の上を借りたいと云ひますからそれを貸してやつて下さい。御送りになるなら北豊嶋郡元田端一〇〇光明院内勝也宛に願います。ついでに記すと、勝也の国史大系は、次郎からランケの世界史と交換で入手したもの。阿部次郎日記・大正五年一月二〇日、および同年四月二二日、『阿部次郎全集』一四・一七三頁、および一五四頁。

- (194) 和辻照『和辻哲郎とともに』新潮社、一九六六年。大平千枝子『阿部次郎とその家族』東北大学出版会、二〇〇四年。

- (195) 注(195)に同じ。

- (196) この部分は改訂に当たって削除されたため、全集には収録されていない。よって和辻哲郎『日本古代文化(初版)』岩波書店、一九二〇年、「序」四頁。あわせて古川哲史『日本古代文化』の初版序について、『和辻哲郎全集(第三次)月報』三、一九八九年。

- (197) 奥田隆男「リックカートとランプレヒト論争」、『経済論叢』一三六―四、一九八五年など。

- (198) 『西田幾多郎全集』一所収。

- (199) 以下は、『近代歴史学』に和辻が付した、「訳者序」、『和辻哲郎全集』二二・二〇三―五頁による。なお、こうしたランプレヒト評は和辻特有のものではない。注(185)の諸論説とも共通するところの多い、その意味で一般的なものであった。そしてランプレヒトにもそうした解釈を許すような面があった。坂口昂はかれの次のような言葉を引用している。「歴史を書くことは即ち研究以上に立ちて一種の芸術家的職能を解決することであつて、即ち存続する現在をその俣感覺するといふ方法を以て、歴史体の生活を喚起することを果たすことである」。坂口昂「ランプレヒトを憶ふ」、『史林』一一四、一〇四頁。

- (200) 大正一三年三月三一日付波多野精一宛和辻哲郎書翰、『和辻哲郎全集』二五・一二九―一三〇頁。

- (201) 大正九年八月二日付和辻照宛和辻哲郎書翰、『和辻哲郎全集』二五・一二二―三頁。

- (202) 和辻哲郎「雑記」(大正七年、『和辻哲郎全集』二二・八六頁)。

- (203) 和辻哲郎「文化と文化史と歴史小説」(大正五年)、『和辻哲郎全集』二二・九五頁。

- (204) 和辻哲郎「近時二、三」(大正六年)、『和辻哲郎全集』二一・三〇四頁。
- (205) 西田直二郎『日本文化史序説』改造社、一九三二年、一九五〜九頁。
- (206) 和辻自身による説明として、「日本の文化についての序説」、『和辻哲郎全集』二四・一六五〜九頁
- (207) 和辻哲郎「文化と文化史と歴史小説」、『和辻哲郎全集』二一・九〇頁。
- (208) 例えば、注(185)に掲げた同時期のランプレヒト追悼文のなかでも、Kulturを、新見吉治と石橋智信は文明と訳し、阿部秀助と坂口昂は文化としている。
- (209) 和辻哲郎「メモランダム」ノート」(大正二年頃)、『和辻哲郎全集』別一・四四頁。
- (210) 大正六年四月一〇日付太田正雄宛和辻哲郎書翰、『和辻哲郎全集』二五・八五頁。
- (211) 家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』岩波書店、一九七二年など。
- (212) 平泉澄「文学に現はれたる我が国民思想の研究・平民文学の時代・上・津田左右吉著」、『史学雑誌』三〇―一、大正八年一月、一四―頁。
- (213) やや特殊な史料ではあるが、「津田左右吉事件公判における証言」、『和辻哲郎全集』別二所収のなかで、和辻はこう述べている。「『文学に現はれたる我が国民思想』でございませうか、是れが出ました時から愛読して居りまして、大正五、六年頃からであります」(四三六頁)。
- (214) 和辻哲郎『日本古代文化(初版)』「序」三頁。初版の本文を見れば、津田への依存は一目瞭然である。
- (215) 法政大学図書館所蔵和辻哲郎文庫〇〇六七四、三八頁。この部分は、浜田義文「法政大学所蔵『和辻哲郎文庫』のこと」、『和辻哲郎全集(第三次)月報』二、一九八九年でも見ることができ。なお、注(213)などより、書き込みのなされた時期は大正五〜六年と考えてよからう。
- (216) 津田左右吉「我が上代史に就いて」、『史学雑誌』二九一六、大正七年六月、七三〜四頁。同年五月一日に行われた史学会例会での講演梗概。
- (217) 和辻哲郎文庫〇〇六七四、四一頁、三六九頁。
- (218) 西田直二郎「津田左右吉氏『文学に現はれたる我が国民思想の研究(貴族文学の時代)』を読む」、『史林』二一―一、大正六年一月、一―四頁。

- (219) 和辻哲郎「文化と文化史と歴史小説」、『和辻哲郎全集』二一・九三〜八頁。
- (220) 和辻哲郎『日本古代文化(初版)』「序」四頁。
- (221) 注(173)に同じ。
- (222) 上京後しばらくは次郎兄のところに寄寓していたが、大正五年九月末に余四男兄のところへ転居、さらに六年一月頃に光明院へ移った。阿部次郎日記・大正五年九月三十日、『阿部次郎全集』一四・一六八頁。「会員動静」、『史学雑誌』二七一一、大正五年一月、一〇七頁、および『史学雑誌』二八一―一、大正六年一月、一二五頁。
- (223) 東京大学大学院人文社会科学系研究科日本史学研究室蔵。なお、年譜類に「僧兵の研究」とあったのは誤りということになる。
- (224) 米谷匡史「資料解題」、『和辻哲郎全集』別二・四八九頁によると、大正初期のものである「哲学及び芸術の根本問題としての自我」は、松屋製の原稿用紙に書かれている。
- (225) 次のような表現から、これらの体験がもった重みを読み取ることはそう難しくはあるまい。「一度奈良の寺々を廻つた人は、其処に見る事の出来る多くの仏像に対して、果して何を感じるか。奈良朝人の奔放な情熱と、その情熱を永遠に鞭打つて行く崇高な魂とは、一々の仏像の中に刻まれて居る」。『平安朝末期』七頁。
- (226) 竹岡勝也『日本新文化史・平安朝末期篇』内外書籍出版株式会社、一九四一年、「序」一〜二頁。本書は、大正一一年に刊行された『平安朝末期』の改訂版であり、序は昭和一六年に書かれた。
- (227) 卒業論文をもとにした「平安朝の寺院と僧兵」には次のような文章がある。「僧兵の活動は何時頃から現れて来るか。(中略)要するに明確な解答を要求する事は出来ない。僧兵的な事実が発生したと云ふ事と、それが記録に現れて来ると云ふ事との間には、可成りの隔りを予想する事が出来る。我々に必要なのは前者でありながら、我々に与へられる解答は後者でなければならぬ。而かも此の後者の場合に於いても、現代に残された記録、或は我々の眼に触れた記録の範囲に限定されなければならない。到底之を以て僧兵の起源を決定することは出来ないのである」(日本歴史地理学会編・刊『日本兵制史』、一九二六年、八六頁)。史料の「限界」の指摘が、史料探求の必要性そのものの否定と隣り合わせであることが分かる。
- (228) 卒業論文をもとにした「平安朝末期の信仰(承前)」、『歴史と地理』七二、大正一〇年二月では、津田左右吉の『文学に現れたる我が国民思想の研究』のうち『貴族文学の時代』へ明示的に言及したのち、「自分は津田氏の此の見方には同意する事が出来ない」と断言している(一〇〜一頁)。本論文の概要を、「津田左右吉氏の所説に対し、平安時代の宗教が遊戯的のものに非ざ

ることを論ぜられたり」としたものがあり、実際にそう読み取られていたことが分かる。「最近考古学界」、「考古学雑誌」一一九、大正一〇年五月。

(229) 『平安朝末期』「凡例」一頁。

(230) 辻善之助「僧兵の起源」、同『日本仏教史之研究』続編、金港堂書籍、一九三二年。「大正六年八月稿、昭和五年六月修正。この稿は旧講案に多少の修正を加へたものである。」とある(三八頁)。

(231) 「平安朝末期の信仰に就て」において、従来は「不真面目な信仰」や「遊戯的信仰」などとなり「残酷な批評」が試みられているとして、辻善之助「信仰と趣味」(同『日本仏教史之研究』金港堂書籍、大正八年九月所収)を挙げている。

(232) 以下、同日の会については、村上直次郎「国史談話会」、「史学雑誌」二九一七、大正七年七月、八六〜七頁。

(233) 勝也以外の提出者の氏名・題目を記しておく。平泉澄「中世に於ける社寺の社会的活動」。上野菊爾「江戸時代蝦夷経営史論」。杉溪由言「公家の家職及衣紋の研究」。藤田亮策「江戸時代の漕運」。藤本了泰「足利中期以後の浄土宗の大勢」。なお、「東京帝國大学卒業式」、「史学雑誌」二九一八、大正七年八月とは若干の異同があり、こちらでは、上野「国際的關係より見たる江戸幕府蝦夷経営史論」、藤本「江戸時代初期の浄土宗」となっている。また杉溪はこの年には卒業していない。翌年の論文題目は「公家の家職特に衣紋に就て」。「東大史学科の卒業生」、「史学雑誌」三〇一八、大正八年八月、九二頁。

(234) 「竹岡先生略譜」、「史淵」三六・三七、昭和二年三月、一七〇頁。卒業論文梗概発表の際とある。

(235) ただし、田中が勝也の卒業論文の審査表に書き入れた閱了月日は五月二六日であり、梗概発表会の時点では、まだ勝也の論文を読了していなかった可能性が高い。

(236) 「叙任及辞令」、「神社協会雑誌」一七一、大正七年十一月、三九〜四〇頁。明治神宮造営局は総務課勤務で六級俸。兼任の内務は神社局第二課勤務。第二課は府県社以下の諸社と神職を取り扱っていた。

(237) 阿部次郎日記・大正七年三月二四日。『阿部次郎全集』一四・二二九頁。顛末は未詳。

(238) 阿部余四男「幼少時代の竹岡」、「古代文化」一〇、一一二頁。いまだ確認できる史料に接してはいないが、倭国一は当時、科学校奨励費などをもとに、大規模に日本刀の研究を推進しており、勝也がその一人であったとしてもおかしくはない。

(239) 注(155)に同じ。

(240) 以下、明治神宮についての記述は、山口輝臣『明治神宮の出現』吉川弘文館、二〇〇五年による。国史学との関連は一六九〜一

- 七二頁参照。なお、黒板勝美については、三七頁、五〇頁、一二六頁など。
- (241) 以下、堀礼治については、新関岳雄『光と影』七四〜九二頁。関連する系図は(上)一四頁。あわせて阿部余四男「幼少時代の竹岡」、『古代文化』一一二頁も参照。
- (242) 「会員動静」、『史学雑誌』二九一—一〇、大正七年二月一〇日、九一頁。
- (243) 以下は阿部次郎日記による。大正七年二月二三日、大正八年一月二三日・二五日、四月一九日・二〇日、十一月二五日など。『阿部次郎全集』一四・二六一頁、二六七頁、二七八頁、三〇四頁。
- (244) 「叙任及辞令」、『神社協会雑誌』一八一—九、大正八年九月、三八頁。
- (245) 「神社局の改造成る」、『神社協会雑誌』一八一—七、大正八年七月、一〜二頁など。
- (246) 清原貞雄(二八八五〜一九六四)については、渡辺澄夫「清原貞雄博士の生涯と業績」、『大分県地方史』三六・三七、一九六五年がある。
- (247) 八年七月からの勝也の月手当は五五円。それまでの属としての月俸は四〇円。
- (248) すでに注(228)(231)で引用しているが、厳密には、正統で題目が異なっている。「平安朝末期の信仰に就て」、『歴史と地理』六一五、大正九年一月、「平安朝末期の信仰(承前)」、『歴史と地理』七一—二、大正一〇年二月。
- (249) 「恵心と法然」、『歴史と地理』九一—二〜三、大正一一年一月〜二月。
- (250) 清原貞雄「総序」、安藤正次『古代』(『日本文化史』一)大鏡閣、大正一一年。
- (251) 「当時、文化史と云ふ呼び声が高かつた世の風潮に動かされ、普段その方面の研究に志あつた人達が、中には私たちのやうに、学校を出たばかりの者も加はつて、勇敢にも本叢書の計画を進めたのであつた」。竹岡勝也『日本新文化史・平安朝末期篇』「序」一頁。なお、各巻の区分と執筆者は、第一巻から順に以下の通り。古代・安藤正次、奈良朝・西村為之助、平安朝初期・太田亮、平安朝中期・西岡虎之助、平安朝末期・竹岡勝也、鎌倉時代・龍爾、南北朝時代・中村直勝、室町時代・魚澄惣五郎、安土桃山時代・花見朔巳、江戸時代前期・白沢清人、江戸時代後期・清原貞雄、明治時代・時野谷常三郎。
- (252) はじめに執筆者を決めていたために起きた事態であろう。「平安朝を三つに割つたのは私の我儘からである。卒業論文に僧兵の事を書いた関係もあつて、末期前から何とかなりそうだが、延喜以後という事になれば到底私の手は届かない」。竹岡勝也「歴史家への歩み」、『古代文化』二一五、七二〜三頁。

(253) (上)注(10)。なお、而立社版以降は、付論として「建礼門院右京大夫」が付けられた。「彼女は要するにその時代に取つては一片の花びらに等しいものであつた」という印象的な冒頭で知られる論文であるが、初出においてはその前に、やや不体裁な次の一文があつた。「宛かも一本の路傍の草がさゝやかな姿の中に大宇宙の真理を宿して居るが如く、自分は今平安末期の社会を顧るに当つてその時代の社会が生み出した一人の女性、建礼門院右京大夫の一生を見捨てる事が出来ないのである」(「建礼門院の女房右京大夫」、『系譜と伝記』二二一、大正二年二月、二九頁)。このように改訂に際しては手が加えられている。この点は本論についても同様であり、それは内容面にまで及び、興味深いものではある。だが歴史家としての出発を扱う本稿ではすべて省略する。

(254) とりあえず、「史学会会會員名簿」、「史学雑誌」三五―一附録、大正一三年一月、一六頁など。

(255) 法政大学百年史編纂委員会編『法政大学百年史』法政大学、一九八〇年、六三七―八頁。

(256) 「熊野速玉祭を拝観して」、「神社協会雑誌」一八一―二、大正八年一月が最初のもの。なお、著者名が竹岡勝二と印刷されているのは誤植。

(257) 「筑波山に於ける神仏分離」、「國學院雑誌」二八一―〇―二一、大正二年一〇―二一月。「明治初年に於ける神職の社会事業」、「神社協会雑誌」二二―一二、大正二年二月。「明治初年の社格と准勅祭神社」、「國學院雑誌」三一―二、大正一四年二月。

なお、最初の論文は、村上專精・辻善之助・鷲尾順敬編『明治維新神仏分離史料』下、東方書院、一九二七年に転載。

(258) 「本居宣長の神道説とその思想的根柢」、「系譜と伝記」一一二、大正一〇年六月。『系譜と伝記』は神社局で同僚であつた太田亮が主宰する雑誌。

(259) 『思想』三五―三七、大正一三年九月―十一月。

(260) 『思想』六四、昭和二年二月所収。

(261) 「愛国心の批判」、「神社協会雑誌」二〇―一二、大正一〇年二月。「愛国心と神社」、「神社協会雑誌」二二―一〇、大正一一年一〇月。

(262) 「現代漫評」、「神社協会雑誌」二三―一三、大正一三年七月。

(263) 至文堂より国史研究叢書の第三編として昭和二年九月に出版。なお、前年刊行の同叢書第一編・第二編とともに平泉澄による『中世に於ける精神生活』と『中世に於ける社寺と社会との關係』。また本書に対しては、もともになつた讀論文を掲載した『思想』

において羽仁五郎による書評が出ている。「歴史における発展と運動―竹岡勝也氏新著『近世史の発展と国学者の運動』」、同『羽仁五郎歴史論著作集』一、青木書店、一九六七年所収。大正時代の「新しい歴史学」は、昭和に入るとさらに「新しい歴史学」と対峙することになる。

(24) 「歴史的精神」、『肥前史談』一六一一、一九四二年四月、三頁。

本論文は、史料の収集にご協力いただいた多くの方々の支えによって、はじめて執筆することができました。松山町では、阿部記念館の門山俊明さんと資料館の齋藤尚さん。山形市内では、山形東高等学校校母野文庫の鈴木喜恵子さんに県立図書館の奈良崎偉雄さん。仙台では、東北大学文学部の昆野伸幸さん、同大史料館の永田英明さん、阿部次郎記念館の高橋嘉代さんに仙台文学館の渡部直子さん。東京では東京大学助手としての佐藤全敏さん。さらには文献等でご教示をたまわった川副昭二先生と森川甫・美穂子ご夫妻。本当にありがとうございました。そして最後になりますが、竹岡羊子さんに心より感謝申し上げます。曲がりなりにも最後まで書き終えられたのは、羊子さんから、勝也さんについて、いろいろとお話を窺うことができたからといっても過言ではありません。ありがとうございました。